

教会とは

—神の望まれる教会—

宗教法人 南本州宣教団

浜 寺 聖 書 教 会

〒592-8345

堺市浜寺昭和町4丁462

Tel: (072)262-7287

Fax: (072)262-0206

目次

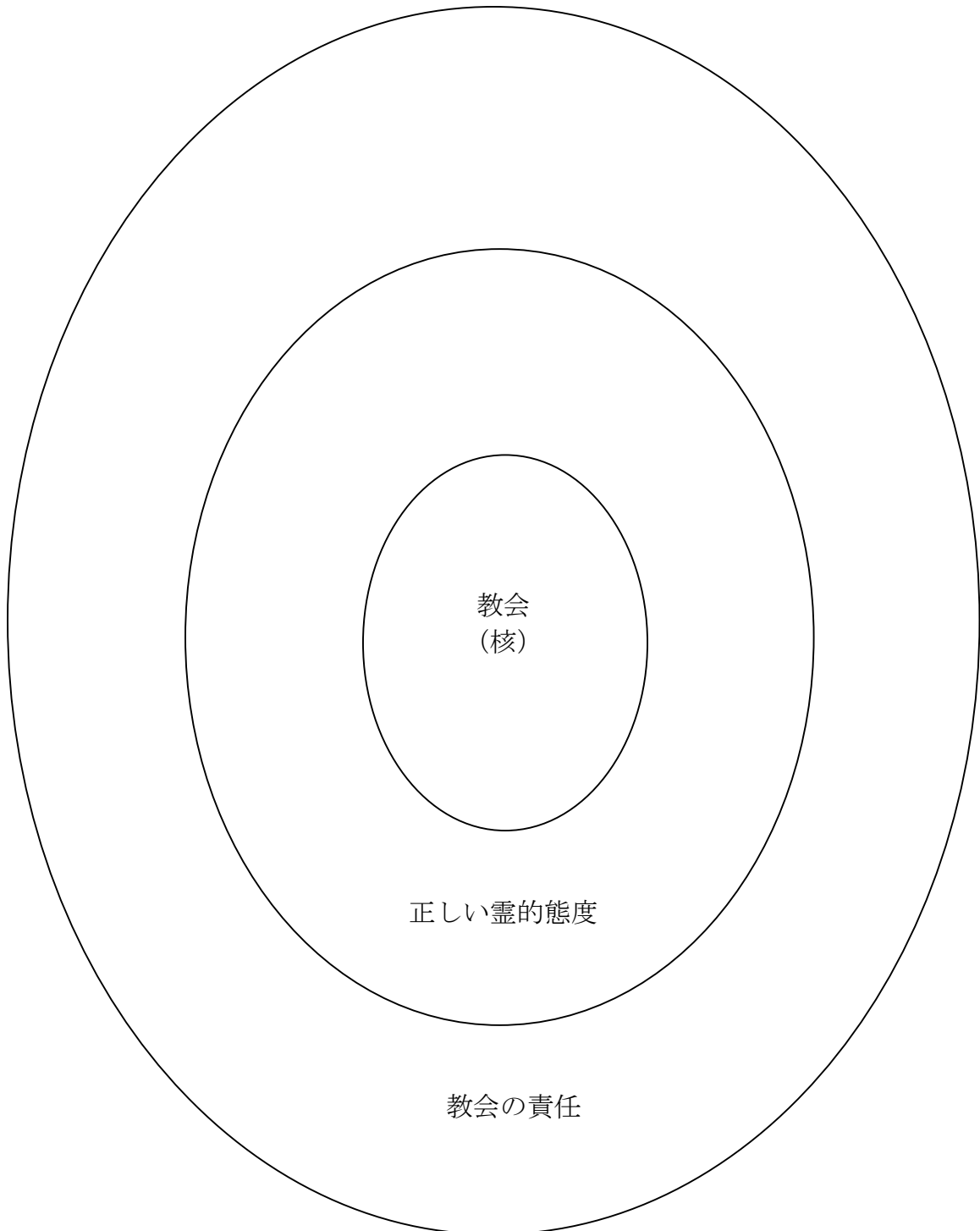
序文	2
教会とは何か？	4
I. 「教会」という語句	4
II. 新約でのエクレスィヤの使い方	4
III. 神の人々	4
教会の目的	6
I. 教会の第一の使命：神の栄光を現わす（II コリント 3:18; 4:4B-6）	6
II. 千年王国との関連における教会の使命	6
III. 世に対する教会の使命	6
IV. 教会自身に対する使命	7
教会の組織	8
I. 長老たち	8
II. 執事たち	10
教会の頭	13
I. 主権者（ヘブル 13:20-21）	13
II. 主権者の働き	13
教会の最重要事項（譲渡できない事柄）	17
I. 神を神として認知する	17
II. みことばの完全な権威を認める	17
III. 正しい教理の上に建つ	17
IV. 個人の聖潔	18
V. 霊的権威を認める	18
教会の持つべき霊的態度	19
I. 従順：主に従う	19
II. 謙遜：自分を低くする	20
III. 愛：神の愛で人を愛する	20
IV. 一致：あらゆる点で一つとなる	21
V. 積極的な働き：皆が働く	21
VI. 喜び：喜びをもって全てをなす	22

VII.	平安：平和をつくるために努力する	22
VIII.	感謝：感謝の心を持つ	22
IX.	自己訓練：神に喜ばれる、用いられる者になる	23
X.	責任：神の前で、人（兄弟）の前で、正しく生きる	24
XI.	赦し：神の赦しに基づき、人を赦す	25
XII.	信頼：神が必要であることを覚える	26
XIII.	柔軟性：必要なことを喜んで行う	27
XIV.	成長：成長することに関して食欲になる	27
XV.	忠実：死に至るまで忠実である	28
XVI.	希望：永遠を考える	28

教会の働きと責任	29
----------	----

I.	説教と教え	29
II.	伝道と宣教	31
III.	礼拝	32
IV.	祈り	32
V.	弟子化	33
VI.	牧会	34
VII.	家庭を築き上げる	34
VIII.	訓練	35
IX.	献金	35
X.	交わり	35

真の教会の姿



序文

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、活動的な教会であると言う。彼らは、毎週持たれる集会の数や、行われている異なったプログラムの数によって、成長を判断する。

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、成長している教会であると言う。新来会者が来会し、定着しているなら、それが、おとなの教会であると思う。牧会スタッフの数が増え続けている。それで、すべてが順調であると信じている。

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、与える教会であると言う。教会員が、働きのために捧げ続けているのなら、また、多くの活動を支えているのなら、それが成熟した教会だと信じている。

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、救霊に燃えた教会であると言う。人々が常に、人をキリストへ導いている。ある一定の、救われる人、また、バプテスマを受ける人の数を、常に数えることができる。それが新約聖書に出てくる教会であると信じている。

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、宣教に重荷を持った教会であると言う。世界中の宣教師をサポートしている、また、予算の多くが世界宣教に使われている教会がおとなの教会であると言う。

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、問題なく、スムーズに運営できている教会であると言う。教会の細部に至るまでよく組織化された教会、すべての人々が、自分に与えられた務めを忠実に、また、能率的に行っている教会がおとなの教会であると言う。

ある人は、「成熟したおとなの教会」とは、聖霊に満たされた教会であると言う。これは、熱心で、力にあふれた、ダイナミックな教会である。教会には多くの興奮や感動があり、皆が自分の賜物を知っており、常に、それを用いている教会であると考え。

最後に、ある人は、「成熟したおとなの教会」の決定的なしるしは、その大きさにあると言う。数千人の人々が日曜ごとに礼拝や教会学校に集まり、有給のスタッフの数が多く、クリスチャンの学校、大学、神学校、出版社などを運営している。

残念なことに、ある人々はこれらのことが、聖書的に正しい「成熟したおとなの教会」のしるしであると信じていることである。—ジーン・A・ゲッツ博士「教会の規準」より—

ここで挙げられている考えは、それ自体が必ずしも悪いものではありません。しかし、教会の成熟度は、このような外面的な事柄で計ることはできないのです。教会はその内面が最も重要なものであり、外面ではないのです。私たちの願いは、私たちの教会が成熟し、キリストが設計されたような教会になることなのです。そのためには、上記のような外面的な事柄に心を奪われるのではなく、聖書が教える成熟の基準をしっかりと理解し、その秤にそって教会を建て上げていく必要があるのです。次の聖書の箇所を見てください。

そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。 黙示録1:12-15

ヨハネが振り向くと、そこには、七つの金の燭台の真中に立つイエスがいました。これは彼が、黙示録に出てくる七つの教会のことを気にかけて、世話しておられることを示しています。イエスの教会に対するこの働きは、これらの七つの教会に限定されているものではありません。現在ある教会に対しても、変わることなくこの働きをなしてくださっているのです。

13節に、キリストは、「足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めている」とあります。当時の預言者、祭司、またイスラエルの王は、このような着物を身にまとっていました。しかし、まことに、イエスこそ、このような権威ある装束を身にまとうにふさわしい方なのです。イエスは教会の中を巡られ、その燃える炎のような目で、各教会の長所、短所、また実際に教会の中で起こっていることをご覧になるのです。

キリストは、ご自身の教会の中で、今も生きておられます。感謝なことは、教会が人によって建てられ、また、維持されているのではないということです。そして15節の「精練されて光り輝くしんちゅう」という表現は、炉の中で汚れを取り除くように主が教会を裁かれることを示しています。教会の中に、主を喜ばせないものがあるなら、主はその罪を必ず裁かれるのです。

ここに記されている燭台は、神に管理され、養われている私たちを意味します。イエスは私たち一人一人の心をご覧になっておられるのです。主は、私たちの内にある、正しくない所を、正しくしようと働かれます。そしてもし私たちがそれを拒むなら、主が与えようとしてくださる祝福が取り除かれるのです。七つの教会にされたように、神はご自分の教会の中を今も歩かれます。主は教会をご覧になって、あることを喜ばれ、また、あることを非難されるのです。私たちは、主からの賞賛を受けることができる教会になっていきたいと願っています。ですから、私たちが主に喜ばれる教会へと成長していくために、まず私たちは「神は、教会に何を求めておられるのか」ということを真剣に考えなければならないのです。

教会とは何か？

神が教会に求めておられることは何かと考えるに当たって、私たちはまず、教会とは何なのかを正しく理解しておく必要があります。多くの人々は、「教会」という言葉を聞くと十字架のある建物のことを想像します。しかし、聖書が「教会」という言葉を使うとき、私たちは建物を想像すべきではないのです。

I. 「教会」という語句

「教会」という言葉は、「エクレシヤ」というギリシャ語の翻訳です。この言葉の語源には「呼び出す」という意味があります。この言葉が教会に対して用いられるのは、クリスチャンが世から呼び出され、神によって、世から分けられたからなのです。

II. 新約でのエクレシヤの使い方

新約聖書には「エクレシヤ」という言葉が、いくつかの使い方で用いられています。一般的にこの語は人々の集会・会合を意味して用いられていました。ギリシャ文化時代にアテネでは、この語は、町議会のような人々の集会を意味していたのです。広い意味では、「エクレシア」とは、市民の集会の意味を持っています。使徒19:32, 39, 41では、これと同等の意味でこの語が使われています。

しかし、新約聖書の著者たちは、この一般的な使用方法とは違った意味を、この言葉を用いるときに与えていました。私たちは「エクレシヤ」という言葉が使われるときに、次の3つの意味がそこに存在することを認めることができます。

A. 地域教会

信じているとするクリスチャンの、ある特定の地域における集いのことを指します。新約聖書では、使徒8:1や11:22、また黙示録2-3章などがこれに相当します。

B. 地上における普遍的な教会

地域に関係なく、信じているとするクリスチャンすべてを示します。使徒12:1; ガラテヤ1:13; 1コリント10:32; 12:28; 15:9などがこれに相当します。

C. キリストの体である普遍的な教会

この意味で「エクレシヤ」が用いられるとき、著者たちは、本当に救われている全信徒のみが含まれる霊的教会（地上に存在する教会ではない）を指しています。コロサイ1:18; エペソ1:22-23などがこれに相当します。

新約聖書が用いる「エクレシヤ」という言葉の意味を考察するとき、教会とは何であるかを私たちは明確に知ることができます。教会とは、土地や、建物、様々なプログラムのことを指しているのではないのです。教会とは、神によって召し出された人たちの集まりのことを指しているのです。

教会（エクレシヤ）という言葉が用いられるとき、聖書は建物のことを指しているのではなく、人々のことを指している。

III. 神の人々

教会とは人々のことであるということが分かりましたが、この人々とはどのような人の集まりなのでしょう。次にこのことを考えてみましょう。

A. 神による集団

教会とは神によって集められた集団です。すでに見たように、教会とは神が召し出した民のことを指すのです。この教会に属する人々は、神がその民として選び、導かれた人々なのです。

1. 神の選び

教会に属する人々は偶然教会に加えられたものではありません。聖書ははっきりと神がクリスチャンを選ばれたのだと記しています。神の主権によって選ばれた人々は、召してくださった神に倣って、聖い者になろうと心がけるのです（ローマ8:33; コロサイ3:12; 1ペテロ1:2）。

2. 聖霊の交わり

救われた者には聖霊が与えられます。そしてその聖霊の働きによって、私たちは神との交わりを持ち、互いに仕え合う者となっていきます。一つの聖霊によって、すべての信徒は一致するのです。ゆえに神の人々は、聖霊の交わりを持った人々であると言うことができます（1コリント12:13; Ⅱコリント13:13; ペリピ2:1; エペソ4:3-4）。

- 信者は御霊の賜物を用いて仕え合う（1コリント12:8～）
- 伝道や教えは聖霊の力によって行う（使徒1:8; 4:31; 1コリント2:4）

B. 責任ある集団

新約聖書には、クリスチャンを指して様々な呼称が用いられています。それらは意味なく用いられているのではなく、それぞれに大切な意味があることを私たちは覚えなければなりません。

1. 信者

人々はイエスを信じる信仰により、キリストのからだである教会に属する者になります。この言葉は、この救いに至る信仰を持った人々のことを指して使われています。

2. 弟子

この語の意味は「学ぶ者」、つまり、あるリーダーに付いて、その教えを学ぶ人のことを指します。イエスは本当の弟子について、「もしあなたがたが、私のことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」（ヨハネ8:31）と言われました。弟子とは、キリストの周りに集まり、従い、教えを受ける人々のことを指すのです（エペソ4:20-21）。

3. クリスチャン

この呼び名はクリスチャンたちが自分でつけたのではなく、アンテオケの異教徒たちによってつけられた呼称です（使徒11:26）。この呼び名は、新約聖書全体でも、ここ以外ではアグリッパ王によって使われたものと（使徒26:28）、ペテロが苦しみを受けることに関連して用いたもの（1ペテロ4:16）の2カ所にしか登場しません。現在もこの言葉は広く使われるのですが、この語が私たちに用いられる理由は、クリスチャンが、キリストに従う者、キリストに属する者であるという事実に基づいているのです（参照：ヘロデ党=ヘロデに従う者 [マタイ22:16]）。

4. 兄弟

信じ救われた全ての者たちは、神の家族に属する者となります（エペソ6:23; 1テモテ6:2）。この言葉は信仰を持つことによって神の家族に変えられた者が、家族として互いに愛し合う、その関係を強調しているのです（1ヨハネ2:10-11）。この語はまた、主の前では全ての信徒が平等であることも意味しています。

教会の目的

I. 教会の第一の使命：神の栄光を現わす（II コリント 3:18; 4:4b-6）

教会において神の栄光を現わすとは、具体的にどのようなことなのでしょう。これは、一言で言えば、「神に似た者となる」ということです。教会が神に似た者となる時、神の栄光を現わすことができます。これには全ての信者が含まれます。信者各自が、内住している聖霊によって、栄光から栄光へと変えられていくことが重要なのです。

パウロは、エペソ1:12で、私たちクリスチャンは、「ただ神の栄光を口でほめたたえておけば良い」と言ったのではなく、「神の栄光をほめたたえる者となる」と言いました。つまり、私たちが「どのような者となるか」が神の栄光、すなわち神のご性質を現すのに重要だと言っているのです（エペソ5:8; 4:17-32; ローマ12:1-2）。

また神の栄光を現わすためには、「何をするか」も重要です。私たちは使徒たちと同じように、はっきりと口で、神がキリストを通して成されたすばらしい救いの業を告白することが重要です。そして、告白同様、私たちの行いも重要です（ガラテヤ5:6; ピリピ2:12-13）。イエスは言葉だけでなく、生き方、行いの力を2箇所教えています。ヨハネ13:35では、信者が愛し合うこと、また、ヨハネ17:21-23では、信者が一致することが大きな伝道の力であることを教えています。

II. 千年王国との関連における教会の使命

旧約の時代から新約の時代へと移行することによって、神はイスラエルを見捨て、教会をその代わりとするようになったのではありません。神はご自身が結ばれた契約を破られることはないのです。神はイスラエルに対する約束を忘れておられるのではなく、むしろ教会を用いて神のイスラエルに対する計画を遂行しておられるのです。

A. イスラエルにねたみを引き起こす（ローマ 11:11, 14）

教会が神の前に従順に歩み、神からの祝福を受けるとき、イスラエルの民は神からの祝福が異邦人に向けられていることにねたみを覚える、とパウロは言います。このねたみを用いて、主はイスラエルの民をご自身の元に引き寄せようとされているのです。この目的を成し遂げるには、私たちが主の前に従順に歩むことによって、神のすばらしい恵みを公に表す生活を送る必要があるのです。

B. 王国のために支配者を訓練する

やがて来たるべき千年王国において、キリストを信じ救われた者は主と共に王として君臨することを聖書は約束しています（黙示録20:4-6）。その王国が築かれた時、そこで太陽のように輝くための準備を今、教会においてしているのです。（マタイ13:43）。その準備は、この世における苦しみを通して、また、キリストの主権に従うことにより行われます（ローマ8:17; II テモテ2:12）

C. 神の恵み、知恵を示す。

これはイスラエルに対する使命として理解すると同時に、この世に対する使命としても考えることができます。私たちは、自らの救いの証を通して、神の恵みをあらゆる人に示していきます（エペソ2:7-8; I ペテロ1:10-12）。神がいかにか罪深い私たちを、その恵みによって救いへと導いてくださっているかを人々に示すのです。また私たちは、この恵みをはっきりと私たちに教えてくれるみことばを人々に宣べ伝えることによって、あらゆる人に神の知恵を示すのです（エペソ3:10）。

III. 世に対する教会の使命

この世に対して教会が持っている使命は伝道です。神を知らない人々に偉大なる神を明らかにし、救いの知らせを伝えることが教会の責任なのです（マタイ24:14; 28:19-20; 使徒1:8; 4:19-20; 17:30-31; 28:23-28）。この伝道は、大きく二つの責任に区分することができます。

A. 個人の責任

一番目に挙げることができるのは個人の責任です。一人一人が伝道の責任を担っているのです。この責任を果たすために、私たちは次のことを熱心に実践していかなければなりません。

1. 福音を語る

初代教会の人々は、キリストに対する忠誠を決して隠しませんでした（使徒4:13, 29, 31; 9:27, 29; 14:3, 18:26）。彼らはどのような状況の中であっても、神の前に忠実であるために、大胆に福音を伝えていったのです。

2. 信仰を実践する

クリスチャンは、語る言葉を通してはっきりと福音を伝えていく責任が与えられています。しかし、それは決して言葉だけの、行いを無視したものではないのです（マタイ5:13-16; ピリピ2:15; Ⅰペテロ3:1-2）。みことばの真理を語るだけではなく、みことばの真理を実践することは、神の偉大さを証するすばらしい伝道の方法なのです。

B. 教会の責任

この世に対する教会の役割を全うするために、教会は良い証の場となることに努めなければなりません。それは教会に属する者たちが、言葉だけではなく互いの必要を満たすことを通して、互いに愛し合い（ヨハネ13:35; Ⅰヨハネ3:16-18）、一致を保ち（ヨハネ17:21-23）、神を正しく礼拝することによって、教会に来る人々に神の臨在を明らかにする中で（Ⅰコリント14:25）、達成されていくことなのです。

IV. 教会自身に対する使命

教会には、周りに対する使命だけでなく、教会自身に対する使命も与えられています。それらは「教化」と「聖化」という二つの言葉で区分的ことができます。

A. 教化

教会は、単なる組織ではなく、主の前に新しく生まれた者たちの集まりであるがゆえに、必ず成長していきます。群全体がキリストにあって成長することは、教会の大きな責任なのです（エペソ4:13-16; Ⅱペテロ3:18）。この働きは、教会のリーダーたちを通して行われますが（エペソ4:11-12, Ⅰコリント14:3）、それは各教会員に成長するための責任がないことを言っているわけではありません。各自が、互いの成長のために、与えられた賜物を生かし仕える、という責任を与えられているのです（エペソ4:12, 16; Ⅰテサロニケ5:11）。

B. 聖化

教会は成長し続けるものです。そして神の前に成長があるとき、そこには聖さが生まれます。神の家族として受け入れられた私たちは、神の聖さを反映させて生きるのです。それゆえに教会は、聖めに関する命令に従うことに努める必要があるのです（Ⅱコリント7:1; Ⅰヨハネ3:3）。

教会の組織

I. 長老たち

新約の教会には、長老 (elders) と執事 (deacons) の職があります。第一次宣教旅行の際、パウロは、教会ごとに長老たちを選びました (使徒14:23)。ピリピ人への手紙においても、はっきりとこれらの職が記されています (ピリピ1:1)。そしてこれらの職がその後も存続するようにと、この職につくべき人々の資格が聖書には示されています (1テモテ3:1-12; テトス1:5-9)。

A. 長老・監督・牧師

長老、監督、牧師という三つの用語は同じ務めを示しています。長老 (プレズテロス) という語は、約20回、使徒の働き、また、書簡で使われています。その意味は「年長の、老人の」で、これらは全て、教会において責任を持った、成長した霊的リーダーたちを指しています。使徒11:30では、非常に早い時期から、教会には「長老」が存在していたことがうかがえます。

監督 (エピスコpos) という語は、新約において5回使われており、その意味は、監督者、後見人、保護者です。彼らの教会における責任は、守ること、そして、全体に気を配ること (使徒20:28) です。

牧師 (ポイメン) という語の意味は、「羊飼い、牧者」です。牧師という語は、羊を世話する、また、養うという働きを強調しているのです。エペソ4:11では、牧師は教師と並んで使われていますが、これは牧師の、教えるという働きを強調しているのです。

これらのことから、長老とは、その人自身を、監督・牧師とは、その人の働きを説明する用語であることが分かります。

B. 長老の働き

長老には様々な責任が与えられています。その代表的なものとして、監督 (管理)、教育、そして、羊飼いとしての働きがあります。

1. 監督：(管理)

キリストが人々のたましいの牧者であり、監督者であるように、長老たちも、全体を監督しなければなりません (1ペテロ2:25)。ヘブル人への手紙の著者は、長老について「神のみことばをあなたがたに話した指導者たち」 (ヘブル13:7) と呼んでいます。

また、1テモテ5:17に、「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。」とあります。この「指導」 (プロイステミ) という語の意味は、「前に立つ」「管理する」「総括する」「治める」です。長老たちの働きの一つは、教会の働きの監督です。

2. 教育

長老たちの資格の一つは、教える能力があることです (1テモテ3:2)。パウロは、テトスの手紙の中で、反対する人たちを正すために、健全な教えをもっていることが大切であると教えています (1:9)。この当時、もうすでに、教会には偽教師たちが入り、惑わしがありました。ゆえに長老たちはしっかりとみことばを知り、正しく、忠実に会衆に教えることが必要だったのです。この責任は、今も変わっていません。特に、牧師・教師と呼ばれる長老たちはそうです (1テモテ5:17)。

3. 羊飼いとしての働き

羊飼いは、羊を義の道に導くことが必要です。また、狼から守ることも大切です (使徒20:29)。このためには、みことばを教えることが必要です。イエスはペテロに、この大切さを教えました (ヨハネ21:15-17)。15と17節では、《ボスケ=餌をやる》という語を用い、16節では、《ポイマイネ=羊を牧する、(民を) 治める、(教会を) 牧する》が用いられています。

羊を世話する羊飼いとして、弱った羊を慰め、励まし、誤りにある者を戒めることが長老の働きなのです (1テサロニケ5:12, 14; 使徒20:35)。長老たちは群の霊的な監督として、教会政策及び、方針を決め (使徒15:22)、全体を監督し (使徒20:28)、人に按手をほどこして (1テモテ4:14)、指導し、みことばを教え、説教し (1テモテ5:17)、人々を励まし、

また、正し（テトス1:9）、羊飼いとして行動し、群の模範となるように努める者なのです（1ペテロ5:1-3）。

C. 長老の数

長老という語は、新約聖書において、常に複数で用いられています（使徒14:23; 20:17; テトス1:5; ピリピ1:1）。ある人々は、「監督」が単数で用いられている1テモテ3:2とテトス1:5-7から、複数を否定しようとするが、文脈を見るとき、ここでは総称的に表現しているために、単数であることが分かります（参照：1テモテ3:1 vs. 使徒10:17 単数しかし複数）。

D. 長老の資格

長老として教会を導く働きをするには、長老にふさわしい成熟したクリスチャンである必要があります。聖書ははっきりとどのような人物がこの働きにふさわしいのかを記しています。長老は、社会で成功している人、優秀な人、人気がある人などといった人間的な要素によって決められてはいけません。霊的に、長老にふさわしい人物が教会を導くことがなければ、そこにあるのは、悲劇以外の何物でもないでしょう。

長老の資格		
	1テモテ 3:2-7	テトス 1
1	非難されるところがない (3:2) クリスチャンとしてふさわしい行動をとっている	// (1:6)
2	ひとりの妻の夫 (3:2) 性的に聖さを保っている (妻に)	// (1:6)
3	自分を制する (3:2) 自制・霊的に安定	自制心 (1:8)
4	慎み深い (3:2) 分別がある、知恵がある	//
5	品位がある (3:2) 尊敬できる、秩序正しいきちんとした生活をしている	
6	良くもてなす (3:2) 物質的裕福を他と分かち合う、必要ある人、旅人に愛を示す、家庭を解放	// (1:8)
7	教える能力 (3:2) みことばの真理をうまく伝える	健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができる (1:9)
8	酒飲みでない (3:3) 酒の虜でない	// (1:7)
9	暴力をふるわない (3:3) 肉体的、精神的暴行	// (1:7)
10	温和 (3:3) 温厚、親切	
11	争わない (3:3) けんか、口論をしない、穏やか	
12	金銭に無欲 (3:3) 金を愛さない	// (1:7)
13	自分の家庭をよく治める (3:4) 家庭を治め導いている	
14	威厳を持って子どもを従わせている (3:4)	子どもが不品行を責められたり、反抗的であっ

	威厳をもって子どもをしつけ、子どもの尊敬を受けている	たりしない信者である (1:6)
15	信者になって間もない人でない (3:6) 成長した人であることを証明するには時間が必要	
16	教会外の人にも評判が良い (3:7) 正しい行いにより、尊敬を受けている	
17		わがままでない (1:7) 自己中心でない、他の人のことを考えずに行動しない
18		短気でない (1:7) すぐに爆発する気性、怒りやすい気性ではない
19		善を愛する (1:8) 神が喜ばれることを求める
20		正しい (1:8) 行いにおいて正しく善と聖さに基づいて判断できる人
21		敬虔 (1:8) 聖い、罪から離れている
22		教えにかなった信頼すべきみことばをしっかりと守っている (1:9) みことばを知り、守り行い、教え、みことばに従順で信仰が安定している

II. 執事たち

前述のように、教会には長老が与えられています。新約聖書の教会を見るとき、長老のいない教会とこのを見ることはできません（もちろん、使徒などのリーダーが他にいて、長老をこれから指名する場合などを除きます）。そして、教会の規模が大きくなり、長老に与えられている最も重要な責任（祈りとみことばの働き）を彼らが果たすことが困難になっていくとき、教会には長老の働きを助ける執事が与えられていることを、聖書は教えています。この執事とはいったいどのような役割を教会で担っているのか、次にこのことを考えてみましょう。

A. その意味

執事という語は、仕え人 (servant) という意味のギリシヤ語 (ディアコノス) から来ています。この語の動詞形 (ディアコネオ=仕える)、また、名詞形 (ディアコニア=奉仕) とともに、新約聖書では100回以上、この語が用いられています。余りにも数多くの意味があるために、どのような働きを指しているのかを特定することが難しいのですが、他の人の必要を満たす働きであったと考えることができます。

B. 起源

教会の歴史を通して、多くの人々が、使徒6章で起こった出来事が執事職の起源であると考えていました。しかし、執事職の起源は、新約聖書の中にはっきりと記されてはいません。そして「食卓のこと」に仕える7名の人たちが選ばれたのが、この執事職の起源と取ることには、数多くの疑問があります（使徒6:1-6）。このことに関する賛成意見、反対意見をまとめると次のようになります。

賛成

- 確かに、彼らのことを「執事」と呼んではいなくても、その働きが記されていることにより、これは執事のことである。(6:1-2)
- ルカが、この出来事を記したのは、新しい職が生まれたことを強調するためであった。

- ギリシャ人イラナエウス (Irenaeus A.D. 130-200) より始まった伝統によると、この7名の人々は、最初の執事とみなされていた。このみことばから、数世紀後より執事の数を7名とする習慣が始まった(助けが必要な時は、執事補佐を置いた)。
- 彼らの資格は、執事の資格と同じである(使徒6:3, 1テモテ3:8-13)。
- かつて、「ディアコノス」という語は、一般的な意味でしか用いられていなかったが、専門的に用いられるようになった。この使徒6章が、その変化の時である。

反対

- 彼らは、執事と呼ばれていない。ピリポも後には「伝道者」と呼ばれている(使徒21:8)。
- この時は、特別な必要が生じたゆえに、一時的に、この務めを設けたように思える。
- アンテオケ教会から救援の物を受け取ったのは、エルサレム教会の長老たちで、執事たちではなかった。
- この7名は、使徒の次に位置されているがゆえに、後の執事たちよりも重要な責任があったようだ。

新約聖書は執事職と使徒6章とを同一のものとして明確に結び付けてはいません。それゆえに、執事の人数は7名でなければならないとするような、使徒6章があたかも執事の条件を教えているかのように考えることは不適切なものです。しかし、この7名を執事職のひな型として考えることはできるでしょう。

C. 執事の働き(務め)

この7名は、教会の貧しい人々の救援の働きのために任せられました。それによって、使徒たちがみことばの奉仕と祈りに専念できました。執事の責任としてあげられているこのような働きのゆえに、執事の資格の中には「不正な利をむさぼらない」が含まれているのです。

また、彼らの資格を長老たちのものと比較する時、「教える能力」以外は同じものが要求されていることに気がきます。これは、執事たちが、ただ物質的な必要を満たすだけでなく、当然、みことばにより、人々の霊的な必要をも満たしたからです。

キリスト教弁証者であった、ジャスティン・マーター (Justin Martyr A.D. 100-165) の記録によれば、献金が、教会の集会で一人の役員により集められ、祝され、そして、執事として知られている人々によって、人々に分配されたことが記されています。執事の第一の責任は、教会の「物質的働き」(特に、貧しい人々を援助すること)でありました。執事、すなわち、「給仕」という語が、この職に用いられた理由がここにあったのです。

新約の教会は、会員の霊的必要だけを考えたのではなく、物質的必要についても考えたのです。この、目に見える兄弟愛の行為が、教会外の人々への大きな証となりました。これに加えて、初代教会では、執事たちが管理において、また、礼典、特に聖餐式において長老たちの手助けをしました。そして長老たちが、霊的な監督の働きに専念できるように、これら以外の働きも行っていたのです。

D. 執事の数

みことばは複数の執事を教えますが、特定の数については教えていません。それは、各教会の必要に応じて決めることなのです。

E. 執事の資格

長老の資格が聖書に明確に記されているように、執事にふさわしい人物がどのようなものであるかを聖書は明確に教えてくれています。基本的にここに記されている条件は長老のものとは大きな差はありません。唯一長老と執事の資格の間に差があるとすれば、それは教えることができるかどうかというものです。それ以外の分野においては、執事は長老同様、霊的に成熟した人物であるべきなのです。

執事の資格	
1テモテ 3:8-13	
1	謹厳 (3:8) 尊敬を受ける人、行ないだけではなく、内側も聖霊によって変えられている
2	二枚舌を使わない (3:8) 正直な人、人によって違うことを言わない

3	大酒飲みでない (3:8) 酒の虜でない
4	不正な利をむさぼらない (3:8) いかなる手段を使っても自分の富を増やそうとしない
5	きよい良心をもって信仰の奥義を保っている (3:9) みことばを自分の生活において適用し、従順に歩んでいる
6	非難される点がない (3:10) 主に忠実で、クリスチャンとしてふさわしく歩んでいる
7	ひとりの妻の夫 (3:12) 性的 (道徳的) に聖い、妻だけを愛し、忠実である
8	子供と家庭をよく治める (3:12) 家庭で良いリーダーシップを発揮し、リーダーとして認められ、尊敬されている

教会の頭

I. 主権者（ヘブル 13:20-21）

「主」（クリオス）という言葉は、新約において92回用いられています。この語には、様々な意味がありますが、新約ではイエスに対して用いられ、1) 主権者、2) 完全な権威を持っている方、という意味で使われています。

エペソ1:22-23は、キリストが主・主権者であることを教えます（参照：コロサイ1:18-19）。またエペソ5:23の「頭」とは、「第一の」、「突き出た」、「至高の」、「最上の」という意味です。頭としてイエスは、教会のすべての権威を持っているのです。

II. 主権者の働き

被造物すべての頭、特に教会の頭として君臨されている私たちの主は、教会に対していったいどのような働きをなしているのでしょうか。このことを考えてみましょう。

A. 教会を建て上げる

教会は、私たちの主のものであります。イエスこそが教会の設立者であり、所有者なのです。

1. 創始者

教会に関する最初の言葉はマタイ16:18に出てきます。ここでイエスは「わたしは・・・教会を建てます」と語られています。この箇所ではイエスは、たとえどのような敵が教会を建てることを妨げようとしても、主が必ず教会を建て上げると宣言されているのです。それゆえに、私たちはこの方のみことばに沿って教会を建て上げるのです。人間の方法・計画を用いて教会を建てるのではなく、神がなされる働きに加わるのです。そして主が始められた教会を建て上げていくためには、神の考えの現れであるみことばに従っていくことが必要なのです。このみことばを通して、神は教会を成長させ、聖なる宮とされるからです（エペソ2:20-21）。

2. 所有者

イエスが「私の教会」（マタイ16:18）と言われたように、教会はキリストのものであります。教会とは建物ではありません。キリストに属する者たちの集まりなのです。私たちがキリストのものになったのは、キリストがご自身の血潮によって私たちを罪と滅びから買い取られたからなのです。それゆえに、私たちは教会を自分の所有物のように取り扱うことを許されていないのです。また教会に人を加えるのも所有者である主の働きです（使徒2:47b）。教会の所有者である主は、人数の増減に至るまで天にあってしっかりと管理されているのです。

B. 教会を育てる・成長させる（エペソ 5:29; I コリント 3:6-7）

パウロは「だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです」（エペソ5:29）と言います。ここで言われている「養う」とは食糧を与えること、「育てる」とは体の温かさであたためることです。Iテサロニケ2:7では、この語は子どもを養い育てている母親のことを語るのに用いられています。母親が子どもを養い育てるように、神は愛する教会を養い育てるとパウロは語るのです。神は様々な方法でこのことをなされます。みことばによって神は教会を養われます（IIテモテ3:16-17）。また、賜物のある人々（牧師）を教会に与えることにより、養い育てます（エペソ4:11-12a）。時に神は、苦しみを与えることによって教会を育てるのです（Iペテロ5:10）。神が教会に食糧を与え、私たちの頑なな心を溶かし、やわらかくして、私たちを新しい者へと変えていってくださるのです。

C. 教会を聖める（ヘブル 13:21）

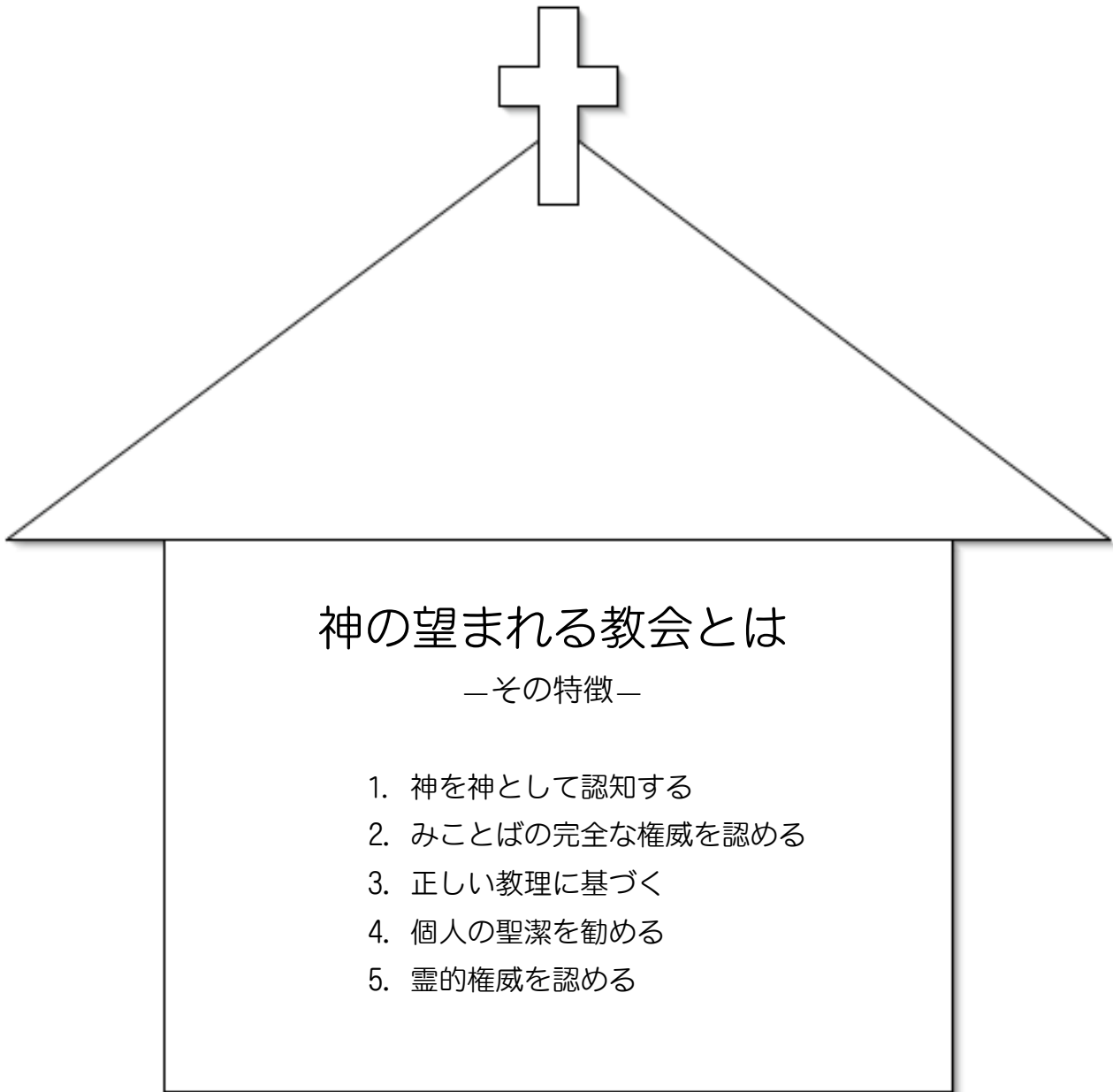
キリストは私たちの内に働いて私たちを聖められます。そのことにより、神の栄光を現わすのです。教会の中に罪があるなら、私たちはその罪を除かなければなりません。キリストはご自身の教会を聖められるのです（エペソ5:25-27）。

D. 教会のためにとりなす。

サタンはヨブを攻撃したのと同様に（ヨブ1:7-12; 2:1-5）、私たちを攻撃します。しかし、イエスは私たちを助けてくださいます。彼は私たちを守り、とりなし、弁護・同情してくださる方、私

たちの大祭司なのです（1ヨハネ2:1; ヘブル4:15）。人となられることを通して、神に従うことの完全な模範を私たちに示してくださいましたイエスは、私たちの弱さを理解し、私たちの必要を知り、私たちのために祈ってくださる方なのです（ヘブル2:18; ヨハネ17:20-26）。

教会はキリストのものです。私たちはキリストによって教会での様々な務めに任ぜられたのです。ですから、私たちの責任は人に対してではなく、頭である主キリストに対するものであることを忘れてはなりません。



神に喜ばれる教会を目指して
神をより深く知ることを目指して

そのために・・・

- a) みことばを正しく教えていく
- b) 学び、そして、実践する者となる

その時・・・

- a) 神の愛するものを愛し、憎むものを憎む者へと変えられていく
- b) 神の計画に沿って、立てられたリーダーたちを支え、信頼して、従って行く

態 度

- | | | |
|-----------|---------|---------|
| 1. 従順 | 2. 謙遜 | 3. 愛 |
| 4. 積極的な働き | 5. 喜び | 6. 平安 |
| 7. 感謝 | 8. 自己訓練 | 9. 責任 |
| 10. 赦し | 11. 信頼 | 12. 柔軟性 |
| 13. 成長 | 14. 忠実 | 15. 希望 |

働 き

- | | |
|----------|-------------|
| 1. 説教と教え | 6. 牧会 |
| 2. 伝道と宣教 | 7. 家庭を築き上げる |
| 3. 礼拝 | 8. 訓練 |
| 4. 祈り | 9. 献金 |
| 5. 弟子化 | 10. 交わり |

教会の最重要事項（譲渡できない事柄）

I. 神を神として認知する

教会にとって、神の栄光を現わすための群であることを認識することは、最も重要なことです。残念ながら、現代の多くの教会は、この重要な点から目を背け、人に焦点を当ててしまっています。

A. 問題点

多くの牧師たちが、神をその御座から引き降ろし、彼らが命じるすべてのことを行わなければならない僕に代えてしまいました。多くの人々は、本当の礼拝について、クリスチャン生活について、また、神について、あまりにも知らなすぎるのです。教会には、働きに忙しすぎるマルタばかりで、主を礼拝することに熱心なマリヤがいないのです。

私たちが、日常直面する様々な問題に対して、多くの本が書かれているにもかかわらず、どうしてクリスチャンは問題を解決できないのでしょうか。それは、人々が、神を真剣に捉えていないこと、また、主の教えに従って歩んでいないことに問題があるのです。

B. 解決

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。

手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。

ヤコブ4:8

神に近づく時、私たちは自分の罪をより深く知ります。そして私たちはその罪を悔い改め、神に喜ばれる者へと変わっていくのです。私たちは神を真剣に捉え、また、褒め称えなければなりません。決して人間中心の教会となっては、ならないのです。

II. みことばの完全な権威を認める

権威ある神が語られたみことばを、権威あるものと認めることは当然のことのように見えます。しかし現代社会において、みことばは、未信者からだけではなく、クリスチャンからも絶対的信頼に値しないものであるかのように見られていることがあります。しかし、そのようなことがあってはならないのです。

A. 攻撃されている神のことば

二人の男性が同性愛の関係を持ってもかまわない、と教える神学校教授。神のことばである聖書は創世記から黙示録まで、すべて神の靈感によるもので、誤りが無い、という聖書の根本的教を否定する教授や牧師たち。そのような聖書に対する数々の攻撃の中でも最悪の攻撃は、聖書を信じているという人々が、聖書を正しく理解していないことです。「私は、聖書の言うすべてのことを信じている」と言いながら、その中の一行もしっかりと理解していないのです。彼らは、いわば知らないことを信じているのです。

B. 神のことばを持ち上げる

人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。 マタイ4:4

もし、私たちが、神の口から出る、すべてのことばによって養われるのなら、私たちは、すべてのことばを学ばなければなりません。最近多くの教会では、みことば以外のことが語られています。しかし私たちは、みことばを教えなければなりません。なぜなら、すべてのことばを理解していくときに、みことばによって私たちは成長するからです。

III. 正しい教理の上に建つ

気持を楽にする、心を温かくする、悲しくする、興奮させる、そんな説教は多く語られていますが、教理を教える説教を耳にすることがありません。少数の者だけが、神についての真理、生命、死、天、地獄、人間、罪、キリスト、天使たち、聖霊、信者の置かれている立場、肉、また、世などについて語っているのが現状です。私たちは、立つことのできる、しっかりした土台となる真理を語るべきです。みことばを読み、その意味を知り、真理を理解し、実践することを繰り返すことによって、他の人々の心に真理を確立させなければならないのです。人には、自分の人生を建て上げていくための、しっかりとした土台である教理が必要なのです。

IV. 個人の聖潔

私たちは、汚れた世の中に住み、その影響を受けています。この世からもたらされる、多くの不道德の教えにより、心が腐敗し、また、結果的に、神から引き離されているのです。悪魔的また性的な描写に満ちた音楽、映画、テレビ、雑誌など、何に心を、目を、耳を開くかを考える必要があります。なぜならば、神は私たちが聖潔に至ることを求めているからです。

愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

Ⅱ コリント7:1

教会は、罪を犯した兄弟姉妹に対し、懲戒（教会戒規）を行うべきです。多くのクリスチャンは、自分の聖潔にあまり関心がありません。しかし、私たちは自分自身に対して、もっと1) 祈りの生活に問題はないか、2) みことばの学びに問題はないか、3) みことばを熟考しているかを問いたださなければなりません。私たちは、皆、神の前に、聖い生き方を求められています。半分だけ捧げた、中途半端な生き方で、神の業が成されることを期待することはできないのです。

V. 霊的権威を認める

神は教会に霊的リーダーを与えられました。それは教会が主の前に喜ばれるものとなるために必要な権威なのです。

A. 霊的リーダー

キリストが教会の頭です（エペソ1:22; 4:15）。そしてキリストは、教会における彼の統治を、敬虔な長老たちを通して仲介しています（1テサロニケ5:12-13）。みことばは、長老たちが主にあって会衆を統治すると教えています。つまり彼らは神から与えられた権威をもっているのです。

しかし、それは、「ここに何かを建てよ!」、「もっと給料を!」、「この部屋をブルーに塗れ!」というような人間的なものではありません。唯一の権威は、みことばの権威を取り扱うこと、みことばを語り、適用することにあるのです。

B. 霊的リーダーに従順であること

霊的リーダーの役割は、人々を正しい道へ戻すため、また、主の栄光のために生きていくように助けるといったものです。彼らはそれを、みことばを教えることと自らがみことばを実践していくこととによって人々に教えていきます。それゆえに、教会員は彼らの模範に従うべきであることが教えられています（ヘブル13:7,17）。

C. 霊的リーダーの働き

教会の霊的リーダーには様々な働きが与えられています。その中でもみことばを取り次ぐことは最も重要な働きであることを聖書は教えています。12使徒の中でも代表者として、人々の前で語っていたペテロは、使徒の名前が列挙されるとき、常に最初にその名前が記されています（マタイ10:2-4; マルコ3:16-19; ルカ6:14-16; 使徒1:13）。またパウロは長老に対する尊敬を教える中で、「良く指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです」（1テモテ5:17）と言って、教える働きをしている者に対する大きな尊敬について語っています。

だからといって、語る者が特別に素晴らしいものではありません。確かにペテロは使徒たちの代表として発言しました。しかし、それは他の者に比べて、彼が霊的にすぐれていたからではありません。彼は、語る賜物があり、他の者たちは、別の賜物を与えられていたのです。リーダーは主が与えてくださった賜物を最大限生かして、主に、そして教会に仕えるのです。それがリーダーの行うべき働きなのです。

教会の持つべき霊的態度

教会の最重要事項について、前回学びました。それらは、教会の核となる部分・骨格ですが、それは教会に生命を与えるものではありません。教会の生命とは、霊的な態度から来るものです。マッカーサー師は、「牧師、及び、教会の他のリーダーの目標は、人々の内に、正しい霊的態度を生み出すことである。」と話しています。リーダーは人々に、「あなたがたは、これをしなければならない、また、あれをしなければならない」とただ言うだけではいけないのです。人々の心に、正しい行動に駆り立てる動機となる霊的態度を生み出す働きをしなければならないのです。

人は、外面的に何か良いことを行っても、それを悪い態度で行うことができます。しかし、本当に良い外面的な行動は、良い態度から来るものなのです。ゆえに、御霊の実を強調することがとても重要なのです（ガラテヤ5:22-23）。正しい霊的態度が教会に存在する時、その教会は、みこころにかなったことを行います。なぜなら、正しい霊的態度を持つ人とはみこころに導かれる人だからです。

I. 従順：主に従う

救いに至る信仰は、主に對する心からの従順を生み出します。絶対的主権者の前にクリスチャンはひれ伏し、一方的な愛をもって私たちを救ってくださった方を喜ばせようと生きるのです。神が人を造られた目的である、「神の栄光のために生きる」ということを実践していくためには、主が語っておられることに對して従順に従うことが必要なのです。

A. 従順になるための必要条件

イエスが私たちの主であるならば、従順が要求されるのは、当然のことではないでしょうか。ルカ6:46でイエスは、「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか」と語っています。ここでイエスは、「もし、わたしを主と呼ぶのなら、どうして従わないのか」と言われているのです。私たちクリスチャンは、イエスを主として受け入れ（ローマ10:9-10）その主権に服従すると決心した者です。その決心は、従順によって特徴づけられる生活となって私たちの生涯に現れるのです。私たちはこのような従順の生活をする、幾つかの重要な理由を挙げることができます。

- 神の栄光のため
- 祝福をいただくため
- 未信者に対しての証のため
- 他のクリスチャンへの模範のため

私たちは、神のみことばを通してみこころを知り、そして、そのみこころに従っていくのです。私たちの働きの目標は、従順な人々を作ることです。それが、神が旧約・新約を通して、一貫して望んでおられることなのです。

B. 従順の結果

ヘンドリックス師は、「クリスチャンになって長い人、中でも、50才以上の人が、最も刺激的で、献身的で、聖潔で、そして、仕える人であるはずだ」と語られたことがあります。

教会の力とは、このような、50才以上の人々から来るべきです。彼らこそ、伝道と祈りにおいて最前線にいる人々なのです。なぜなら、彼らは教会の中の誰よりも長い年月を、神と共に生きてきてきたからです。救われて数年の若者に比べて、彼らは長い間みことばを自分の生活に適應することにより、より忠実で成長したクリスチャンとなっているからです。

C. 従順になることの放棄

もし、あなたがクリスチャンでありながら、神のことばを人生に適用しないなら、あなたは活力をなくした老人と同じです。そして、霊的に引退することを望むようになるでしょう。あなたは、「私は、長年に渡って教会へ通っている。私は、伝道に加わりたくない。それは、若者に任せておけばよい。」というような言葉を口にするようになるのです。

旧約時代、リーダーの多くは老人でした。初代教会も、成長した大人の聖徒たちの力によって始められました。しかし、現代の教会は、若い人の力に頼ろうとしています。確かに若い人の力も必要でしょう。しかし、教会に最も必要なのは、長い間忠実に従って来られた方々の知恵と力なのです。

残念ながら多くの信者は、聞いたみことばを適用しようとしながゆえに、年齢が増し加わっても生活が変わっていきません。霊的な事実を多く知っていても、彼らの生活には力がないのです。そんな状態では、教会における様々な働きを、熱心に続けていくことは困難になって当然です。マッカーサー師は、「多くの人々が、結果的にキリストに仕えることを止めてしまうのは、みことばを聞きはするが適用しなかったからである」と分析しています。
私たちは、神のみことばに従うことに専心すべきなのです。そして聖霊があなたに真理を教えるとき、それを適用する事が必要なのです。

II. 謙遜：自分を低くする

キリストだけを誇りとする者こそが謙遜な者です。その人は、自分が何を受けるにふさわしい者であるのかをよく知り、そんな自分に与えられている神の恵みをよく理解している人なのです。

A. 自らの本当の姿

私たちには、何か神の前で誇れるものがあるでしょうか。私たちは、マタイ18:23-34に描かれている、返済不能の男のような者でした。神の前に、霊的にまったく破綻した状態だったのです。それゆえに、救われて神の子とされる、という特権を受けるにふさわしいものを、私たちは何一つ持っていなかったのです。私たちにふさわしいことは、永遠の罪の裁きだけでした。しかし、神はそのような私たちを、一方的な憐れみと恵みによって救ってくださったのです。
私たちがほめるべきなのは、この神だけです。そのことを認識している者は、決して誇ることがなく、また、自分が誇ることでできない者であることをよく知っているのです。

B. 謙遜の重要性

神はクリスチャンを犠牲的、また、謙遜になるために招き出されました。ですから、みことばは繰り返し謙遜について教えています（マタイ16:24-25; 10:38-39; ペリピ2:3-4）。他の人の名誉を求めると、また、必要を満たすことが大切です。私たちは、弟子たちが行ったような、誰が優れているかに関する論争を繰り返してはならないのです（マタイ20:20-21; マルコ9:33-35; ルカ22:24）。

C. 謙遜の実践

謙遜とは、自分を必要以上に価値のない者と見て、自己卑下することではありません。私たちは、自分がどのような者であるのかを正しく理解し、私たちが贖ってくださったキリストに価値を見いだす者です。神の前に罪人であったがゆえに、誇るどころの何もない私たちは、他の人を自分以上に重要であると考えます。この「他の人が自分以上に重要である」と考えることこそが、聖書が教える謙遜なのです（ペリピ2:3）。
また、キリストは私たちに、「父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」（マタイ19:19）と言われていました。自らの必要を満たすように、隣人の必要を満たす責任があるのです。自己中心的になるのではなく、自分のことよりも人の必要を考えることが、謙遜という態度の実践なのです。

III. 愛：神の愛で人を愛する

この世が教える愛とは、感情に基づくものです。それゆえ、その感情がなくなれば、関係も終わってしまいます。またこの世の愛とは、受けることだけを求め、与えることを求めないものなのです。しかし、聖書の愛は違います。聖書の愛は感情の愛ではないのです。それは、犠牲的な行為なのです。ただの態度ではなく、もちろん言葉だけのものでもなく、それは行動によって現されるものなのです。
愛は、必ず何かを行います。ですから、原文では1コリント13:4-7で用いられている愛を表現する言葉すべてに、動詞が使われているのです。愛とは、へりくだった心から、溢れ出てくる行動のことなのです。

イエスは良きサマリヤ人のたとえの中で、私たちに愛がどのようなものであるのかを教えてください（ルカ10:27-37）。一体誰が私たちの隣人なのか、という問いを通して、イエスは私たちに、すべての人に対して愛の行為を実践することをチャレンジされているのです。

またヨハネ13章で、誰が一番偉いかと論じ合っていた弟子たちに対して、イエスは、愛を示されました。弟子たちは、自分から仕える者となって、他の人々の足を洗うことを拒みました。ところが、イエスは腰に手ぬぐいをまとい、一人一人の足を洗われたのです（13:4-5）。そして、みな足を洗い終わった

時、私が愛したように互いに愛し合うようにと言われました（15節）。イエスは、人々の必要を満たすことによって愛を示されたのです。

世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。
1ヨハネ3:17

私たちは、教会に来られる新しい方に対して、愛を示しているでしょうか。友人との話に忙しく、他の人の必要を満たしていないということはないでしょうか。愛を実践することを私たちは考えなければならないのです。

IV. 一致：あらゆる点で一つとなる

イエスは救われた結果として一致が生まれることを教えています（ヨハネ17:21）。またパウロも、一致とは作り出すことではなく、すでに与えられているものを保つことであると語っています（エペソ4:3）。そしてサタンは、教会にとって一致が重要であるがゆえに、その一致が保たれないように攻撃してきます。一致があるところに、神の栄光が現されるからです。

私たちは常に、互いに神の前にひざまずき、御霊による一致と、平和を保つことを祈り続けるべきです（エペソ4:3）。パウロはコリントの教会にそのことを願っていましたし（1コリント 1:10-11）、またピリピの教会へは、福音の信仰のため、共に励むように勧めていました（ピリピ1:27）。

V. 積極的な働き：皆が働く

「教会には、自分の働く場所がない」また「私たちは必要とされていない」などと考える人々がいます。しかしこのような考え方は、聖書が教える教会のあり方とは大きく違います。教会を構成するメンバーは、一人一人が働き人であり、教会が主に喜ばれるものとなるために必要な存在なのです。

A. 僕

1コリント4:1に出てくる「僕」という言葉は、原語のギリシャ語ではいくつかの違った言葉で表現することができます。ここでパウロは、そのいくつかある言葉の中でも、最も低い僕の意を伝えるために、「ヒュパレテス」という語を用いました。その当時「トリレメス」と呼ばれる大きな木製の三段の舟がありました。この船は、鎖につながれた奴隷たちによって漕がれていました。大勢の奴隷たちが各段で船を漕いでいたのですが、その中でも最も低い段にいた者たちを、「最も劣った漕ぎ手」と呼んでいました。そしてこの最も劣った奴隷を指していた言葉が「ヒュパレテス」という言葉だったのです。パウロたちは、自分たちがこの最も劣った奴隷たちとして知られることを願っていたのです。

神は私たちを、この最下層で船を漕いでいた奴隷となるために呼び出されたのです。私たちは自分の名誉のために働きをするものではありません。また何かの働きのゆえに、自分自身を良く評価するのでもありません。私たちは神の名誉のため、神の栄光のために、忠実に仕える最も低い僕であることを忘れてはならないのです。

B. 互いが必要

人に対する働きかけは、必ず具体的な教会の活動に関連していなければならない、というわけではありません。様々な教会での働き以外にも、クリスチャンは互いのために働くことができるのです。パウロは、ローマ12章で、僕の働きについて、人のからだを用いて語っています（4-8節）。私たちに与えられた賜物を用いて仕え合うこと、また、私たちが御霊に満たされて歩む時、神が教会に必要な働きを、あなたを通して行おうとされることを、パウロはこの箇所では教えています。ゆえに、私たちは自分ができていることを喜んで、また、進んで行う必要があるのです。

キリストのからだである私たちは、たとえ一人でも、与えられている賜物を生かすことなく生きるならば、主に正しく仕えていくことが困難になることを覚えておかなければなりません。それゆえに、一人一人が主に仕え、互いに仕え合うことが教会にとって大切なことなのです。そして、主に従順であるがゆえに、仕えることを通して、喜び、祝福を得る生涯を送ることができるのです。そのためにクリスチャンは、主が与えてくださった賜物を用いなければなりません。たとえそれがどのような働きであったとしても、「この働きに加わるべきかわからない。あのような人たちと共に働きたいくない」などと考えて何もしていないことは、主が喜ばれることではありません。何でも喜びながら働きに加わっていくことを、神は望んでおられるのです。私たちは自らを低くし、人に仕えていくことを学び、実践していかなければならないのです。

VI. 喜び：喜びをもって全てをなす

喜びとは、イエス・キリストとの関係に対する、人の心・霊・魂の反応です。人生では多くの苦しみ、悲しみを経験しますが、同時に私たちは喜びも経験します。そしてその喜びは、神に対する知識に基づいているのです。クリスチャンは、みことばを学び、それに従う時、本当の喜びを得るのです。

ヨハネは、「私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです」（1ヨハネ1:4）と記します。またパウロは「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」（ローマ14:17）と教えます。また、ヨハネ17:13で主は、「わたしは今みもとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあってこれらのことを話しているのです」と語っておられます。つまり、私たちの喜びは、みことばと、みことばの実践に大きく関係があるのです。

「喜びは、積極的に仕えることにつながっている」とマッカーサー師は語ります。人々は、仕えるときに、また、神が与えてくださった賜物を用いるときに、喜びを経験するのです。つまり、自分が何かを得ることに喜びがあるのではなく、自らを与えるところに喜びがあるのです。自分のことばかり考え、また、自分の必要を満たすことだけ、自分の問題を解決することだけに努める時、そこに生まれるのは、不満、みじめさ、不満です。また、そのようなことのみを求めるとき、決して成長は生まれないのです。

私たちは自分を捧げる時、喜びに満たされます。「私には問題がある」と知ることは喜びを生み出すことを妨げません。なぜなら、その問題を解決してくださる神を私たちは知っているからです。問題があることを理解し、それゆえに神の力に身を委ね、神に従順に歩むときに、私たちは神の御業を見ることが出来るからです。もし、問題がなければ、私たちは自分の力で全てできるという、恐ろしい過信を抱いてしまいます。神を知っている人は、どのような状況の中でも喜ぶことを知っている人です。神があらゆる困難をも用いて、ご自身のすばらしさを私たちに示してくださり、その中で、私たちに助け、導き、守り続けてくださるお方であることを、クリスチャンは知っているからです。しかし、人は自分で喜びを失う選択ができます。置かれている状況だけを見つめ、問題の解決を主に正しく求めないとき、人々は喜びではなく、絶望を選択するのです。神の偉大さを知っている者は、そんな中であっても神の観点からすべてを見るがゆえに、そこには解決があり、そして喜びがあるのです。

VII. 平安：平和をつくるために努力する

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」
ヨハネ14:27

喜びのある所には平安があります。平安は、すべてが正しく制せられているところから生まれる、内側の満足であり、喜びは、その外側への表現なのです。それゆえ、罪が内にある時、平安を経験することがありません。しかし、罪が赦され、御霊によって歩んでいるなら、そこには平安があるのです。

教会とは、人々の心に平安・休息・神への確信の態度を芽生えさせる場所であるべきです。クリスチャンとは「平和をつくる者」なのです（マタイ5:9）。この「平和をつくる」ということは、教会で私たちができる、最もすばらしいことのひとつです。しかし、この行為は人間の性質と相反するものです。ヨブは次のように語ります。「人は生まれると苦しみに会う。火花が上に飛ぶように」（ヨブ5:7）。

人間関係の衝突を繰り返していく中で、私たちは、平和をつくる者として主によって呼ばれたのです。それゆえに、どのような問題の中に巻き込まれたとしても、平和をつくる者でなければならないのです。争っている者の、どちらの肩をも持つてはいけません。私たちは、悪いことではなく、良いことにこそ注目すべきなのです。私たちは、人の気にさわることを言わないように心がける必要があります。そしてそれは、まず私たちの家庭から始めなければならないのです。唯一私たちが戦うのは、誰かが真理に背いたときなのです。

VIII. 感謝：感謝の心を持つ

すべてが自分の思い通りにいっているから感謝するのではなく、どんな時でも、どんなことが起こっても、感謝の心を持つように私たちは命じられています（1テサロニケ5:18）。そして私たちがこの命令を実践する時、多くの問題を解決することができるのです。なぜなら、神に感謝し、讃美を捧げる時、私たちは問題にのみ目を向けることをやめ、問題を解決することができる神に私たちの目を向けるからです。感謝のない人の生活とは、不平不満の多いものなのです。

では、私たちはなぜ常に感謝を捧げるべきなのでしょう。感謝の理由をいくつか挙げてみましょう。

- 詩篇30:4——彼の聖さ

- 詩篇106:1——いつくしみ
- IIコリント9:15——キリストの贈り物のゆえ
- 黙示録11:17——キリストの力、来るべき王国
- Iテサロニケ2:13——みことばを受け入れ、適応する人々
- ローマ7:23-25——キリストが罪から解放してくださった
- Iコリント15:57——死に対する勝利
- ダニエル2:23——知恵と力が与えられた
- IIコリント2:14——福音の勝利
- ローマ6:17——人々の救い
- ローマ1:8——信仰が明らかに示された
- IIテサロニケ1:3——人々が神のために、一生懸命働いていること
- Iコリント1:4——神の与えてくださった恵み
- IIコリント8:16——キリストに対する熱心を持っている

私たちが、自分をもっと良い状態にあるべきだとか、良いものを受けるべきだ、などと思い始める時、私たちの心から感謝が失われていきます。しかし、私たちが良く理解しておかなければいけないことは、もし、私たちが受けるにふさわしいものを受けたとしたのならば、私たちは地獄へ行っているのです。つまり、私たちは良いものを何一つ受ける資格などないのです。神が与えてくださったすべてのものに対して感謝を持つ時、問題から痛みを取り除くことができるのです。

IX. 自己訓練：神に喜ばれる、用いられる者になる

クリスチャンは、神の聖い標準に適合することがいかに重要か、ということに気づく必要があります。自己訓練とは、罪から離れること、そして正しいことのみを行うように自らを鍛錬することなのです。

A. その必要性

パウロは、Iコリント9:24-27で、競争という比喩を用いて、自己訓練の必要性について述べています。私たちは競争のために呼び出された者なのです（ガラテヤ5:7; ペリピ2:16; ヘブル12:1-2）。そして、私たちは競争に勝つために一生懸命走ります。それに必要なのは自己訓練であると、パウロは25節で教えています。また、勝つためには、ルールに従うことが大切であることを、パウロは26節で教えています。同じことをパウロはIIテモテ2:5で、テモテに伝えています。27節でパウロは、彼自身が罪を犯したくない、また霊的な勝利の機会を逃したくない、と心から願っていることを明らかにしています。

B. 戦い

私たちはこの世にあって、霊的な戦いを戦っています。そしてこの戦いの真剣さを、しっかりと知る必要があります。そこで神が与えてくださった二つの武具について、エペソ6:11-13を少し考えてみましょう。

1. 真理の帯

ここでパウロは、ローマ兵のことを頭に描きながら書いています。ローマ兵が戦いの備えをする時、必ず上着の上に帯をしました（チューニック＝袖の短い上着）。もし帯をしなければ、上着が戦いの邪魔をしたのです。それゆえ、彼らはしっかりと上着を帯でとめたのです。パウロはこの帯を、ここで真理の帯と呼んでいます。なぜなら、彼はそれを自己訓練に対する、真実の（誠実な）誓いと関連させたからです。私たちは、神の望んでおられる道を歩むことが大切です。しかしそこから離れさせようとする声があります。そのような誘惑に対して、私たちは自らの上着をしっかりと真理の帯で締めて、私たちが自己訓練の道からそれることがないように、準備を整えておかなければならないのです。もし、それを怠り、私たちが神よりも快楽を愛するのなら、私たちは神が望まれている自己訓練の道から離れ、罪に入ってしまうのです。

2. 正義の胸あて

私たちは、正しい、義なる生き方をする必要があります。それは神のおきてに従順であることです。私たちが信仰の競争で勝利するために、私たちは神のみこころに従った聖い生き方をしなければなりません。それには自らを訓練する必要があります。IIコリント7:1でパウロは、「愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉

の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。」とっています。私たちが神の子であるから（Ⅱコリント6:18）、私たちは、自らを訓練することにおいて、また正しく生きることにに関して、真剣であるべきことを私たちに教えているのです。

C. 実践

聖い、自己訓練の生活は、神の言葉に基づいて持たねなければなりません。それゆえに、みことばを学ぶこと、また、そのみことばを熟考することは重要なことなのです。詩篇の著者は、「あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました」（119:11）とっています。私たちの考えが、みことばによって導かれ、支配される必要があるのです（コロサイ3:16）。神のみことばが訓練の源であるがゆえに、私たちはそのみことばを良く知る必要があります。

また私たちは、みことばを知ること熱心であるだけでなく、普段の生活にも注意しなければなりません。私たちがどのようなものを見たり、聞いたりするのかをよく考える必要があります。様々なものが私たちに影響を与えています。それらは私たちをクリスチャンとして成長させるものなのかどうかを、私たちはしっかりと吟味する必要があります。

親は、子どもたちの前で模範を示しているかを考えなければなりません。何を見、読み、聞き、そして話すのか、これらの事柄は子どもに対して大きな影響を与えているのです。親は、神から子どもを与えられました。それゆえ親には、神の前に管理者としての大きな責任があるのです。もし、子どもたちが見るべきではない事柄にさらされることを親が許すなら、あなたは、その責任を神から問われるのです。私たちは神の基準を下げてはなりません。神を恐れていることを、実際の行動で示すことが必要なのです。

私たちは、訓練の生き方が重要な時代に生きています。もし、私たちが汚れたものや、罪の行為の虜になっているのなら、私たちは、神が呼びだされた目的にふさわしく歩んでいないのです。私たちは、従順の道を歩まなければなりません。パウロは次のように語ります。

最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。（ピリピ4:8）

私たちは、これらのことにこそ目を留めるべきであり、決して神の要求する基準を下げて、妥協してはならないのです。

X. 責任：神の前で、人（兄弟）の前で、正しく生きる

教会の皆に教えなければならないことの基本は、一人一人が互いに対して責任を持っているということです。関心を払うべきなのは、物やプログラムではなく、人々なのです。マタイ7章で、イエスは重要なことを教えられました。3節で主は、「また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。」と問われました。つまり、「どうしてあなたは、自分の抱えている大きな問題より、兄弟の小さな問題を気にするのか」と問われているのです。また4節では「兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか」と語られています。ここでも「どうして、自分により大きな問題があるのに、より小さな問題のある兄弟を助けることができるのか」と問われているのです。

主はこの箇所、私たちが人を正しく裁くことを教えています。そしてこのことを実践するには、私たち自身が正しく歩むために、自らの不義に繊細であることを主は教えているのです。確かに、私たちは互いの目にあることに気を配るべきです。また、互いの罪を正しく扱う必要があります。しかし、それを行う前に、自らの罪に取り組む必要があるのです（5節）。互いに責任を負い合うことは重要なことです。しかし、人のことを解決する以前に、自分の生活が正しくなければならぬことを、主は私たちに問われるのです。

罪を持っている兄弟たちに対して、聖書は私たちが責任を全うすることを要求しています。ガラテヤ6:1で、パウロは「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」と教えます。ここで私たちは、不従順の中を歩んでいる人を助けるには、従順の歩みをしている人が必要であることを知ることができます。人は、不従順の人を助ける前に、自分の生活を正しくしていなければいけないのです。そして教会の一人一人が、互いにこの責任を負い合う時、それは自らを聖めるというすばらしい結果をもたらすことになるのです。

では、こうしてまず自分の罪が正しくされた後、どのように、罪の中にいる兄弟に接するべきなのでしょう。このことに関して、イエスはマタイ18章で私たちに大切な原則を教えてください。イエスの言葉を見てください。

また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。
もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。 マタイ18:15

ここで私たちが教えられていることは、私たちが罪を犯している兄弟を知っているならば、まず一人で、その人の所に行くべきであるということです。たとえば、不正直なビジネスマンがいるとしましょう。その時、あなたは神の前における責任上、その人の所へ行かなければなりません。そして愛をもって「あなたのしていることは、間違いである」と言うのです。もし、「私にはそんなことはできない。私にも罪があるから・・・」と言うのなら、まずその罪を悔い改めて、自分の問題を解決する必要があります。「自分の罪の解決には時間がかかる」と考えるかもしれませんが、しかし、神の前に悔い改める時、私たちは赦されるのです(1ヨハネ1:9)。主の前に自らの罪を告白し、悔い改めるとき私たちは赦されます。そして私たちは同じ悔い改めを、罪を犯している兄弟に求めるのです。

もし、妻に対し忠実でない人、みことばに従って子どもを育てていない親、また、親に従っていない子どもを私たちが見るとき、私たちは、その罪を責めることによって、彼らが罪を理解することを助けることができるのです。パウロも、ガラテヤ2:11-14で、人々の前でペテロを責めました。使徒であったとしても、一般信徒であったとしても、罪があるとき、その罪は責められなければならないのです。罪人は悔い改め、神に立ち返るために、責められる必要があるのです。

このように、罪の懲戒を実施する時、「分裂してしまうのでは・・・」、「人が減ってしまうのでは・・・」、などの恐れがおこるかもしれませんが、しかし、私たちは教会を建て上げていくことに関して、心配する必要はないのです。キリストは主ご自身がそれをなさると言われました(マタイ16:18)。それゆえに私たちに

とって必要なことは、教会のすべての者が、みことばを理解し、それを正しく適用することなのです。主が、それ以外のすべてのことをしてください。

上記の責任以外にも、私たちが持っている責任に関して、みことばは次のことを教えてください。

- 互いに励まし合う(ヘブル10:24-25)
- 祈り合う(ヤコブ5:16)
- 愛し合う(ガラテヤ5:13; エペソ4:2; 1ペテロ1:22)
- 教え合う(コロサイ3:16)
- 教化し合う(ローマ14:19; 1テサロニケ5:11)
- 戒め合う(ローマ15:14; コロサイ3:11)

これらのことが、教会のいのちを作り上げるのです。

XI. 赦し：神の赦しに基づき、人を赦す

教会は、赦しがないと成長することはできません。私たちはみな罪人であるがゆえに、赦しは重要な、また必要な態度なのです。私たちが人の罪を赦せない、特に、その罪が自分に対して犯された罪であるならば、それは私たち自身に、またキリストのからだである教会に癌があることに等しいのです。

A. 赦しを受ける。

マタイ6:12でイエスは、赦しについて語っています。そして14、15節で、他の人の罪を赦さなければ、神もあなたの罪を赦さないと教えられています。もちろんこれは、永遠の赦し(私たちがキリストを救い主として信じた時に受ける赦し)について語っているものではありません。これらは、地上における一時的な赦しです。しかし、神からの赦しを受けた者は、自分たちも同様に他人を赦すことを実践する責任が与えられているのです。それを怠るとき、神は神の子どもである私たちを責め、懲らしめるのです(ヘブル12:5-11)。もし、神、また兄弟姉妹と、聖く祝された交わりをもつことを願うのなら、この赦しの態度をもつことが必要なのです。

B. 赦しを拒む

どうして人を赦すことができないのでしょうか。マタイ18:23-34でイエスは次のようなたとえを用いて、このことを私たちに教えます。主人から多額の借金をしていた者が赦されました。しかし彼は、自分に借金をしていた者を赦すことができませんでした。それゆえに、借金をしていた者は、その支払いすべてを終えるまで、牢に入れられたのです。クリスチャンであるならば救いを失うことはありません。しかし、神が求めている赦しの行為を拒む者に対して、神は確かに懲らしめを与える

のです。人を赦すことを拒む者は、自分が赦される価値の全くなかった者であることに気づいていません。私たちは、このような赦される価値のない者であったことに気づき、そんな自分を赦して下さった、神の完全な赦しを覚えることを通して、人を赦すことができるようになるのです。人を赦さない心は罪であり、それは私たちの生涯に多くの悪い影響を与えるのです。

C. 命令

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦して下さったように、互いに赦し合いなさい。」 エペソ4：32

神が赦して下さったゆえに、「互いに赦し合いなさい」と、パウロは命じています。教会は、赦すことのできる人々で満たされる必要があるのです。たとえ救われていたとしても、罪を持っているがゆえに、人は常に失敗をし、必ず誰かの気にさわることをします。そんな中で、もし私たちが、進んで相手を赦すことができるならば、私たちは、苦しみの束縛から自由にされるのです。赦しは美しい態度です。教会には「赦せない」というような苦しい心は必要ありません。この赦しの態度が教会にないことは、大きな問題なのです。

本当にへりくだった者だけが赦すことができる、ということを私たちは知らなければなりません。誇らしげな人は、「私にこんなことをしておいて、どうして逃れることができようか」と言って、「赦さない」という罪を犯すのです。しかし、へりくだった人は、「あなたは私より重要です。私は赦しを示すことによって、あなたを愛したいのです」と言って、積極的に赦すことに努めようとしません。

XII. 信頼：神が必要であることを覚える

この「信頼」という言葉を、別の言い方で表現するならば、それは「不十分」、「不満足」といった状態を指すことができるでしょう。つまり、自分自身では十分でないということを悟ることなのです。このような状態を、いわゆる「できる」、優秀な人々の内に成長させることは困難なことです。教会においても、過去に成し得た事を振り返る時、私たちの力で事を成し遂げた、と思ってしまうことがあります。そして、その思いが、神に対する信頼・依存の必要性を薄れさせるのです。もし教会が注意深くなければ、その働きから神を除去、排除しかねません。特に、教会が人々の力やプログラムに信頼する時、このようなことがおこるのです。現代の自由な社会に、何不自由なく生きている私たちにとって、神に信頼することは、それ程重要とは思えず、あまりその必要を感じることがありません。それは致命的なことなのです。私たちはイスラエルが神を忘れたように、神を信頼することを忘れるという同じ過ちを犯してはならないのです（申命記6:10b-11a）。

A. 神より先走る

詩篇19篇で、ダビデは「あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。」（19:13）と祈っています。神に信頼せず、神のみこころを求めずに物事を行うことは、おごり高ぶる人間にとってさほど難しいことではありません。このような傲慢さを避けるために、私たちは何を決断するにしても、神の働きであると確信するまで、忍耐をもって祈り、神と交わることが必要です。神の望まれないことを行うことほど、私たちにとって恐れるべきことはないのです。クリスチャンであるならば、神が持っておられるものと同じ目標を持ちたいと考えましょう。特に、教会がどのようなものであるべきなのか、何をなすべきなのかということを考えるとき、私たちは神の願っていることを行いたいと考えます。なぜならば、私たちではなく、神が教会を建て上げておられることを私たちは知っているからです。私たちは、神と競争したくはありません。しかし、すぐにでしゃばってしまい、神の助けなく物事をしてしまいがちなのです。

B. 祈りつつ

祈りは、でしゃばりを防ぐカギです。教会は、神を信頼するという精神を決して失ってはなりません。教会が数多くのすばらしいプログラムを持ち、また、すばらしい働きをなす時、神に信頼することを止めてしまうのは実に簡単なことです。成功を取めているプログラムや、それらのプログラムを支えている人々に信頼を置き、実際に成功を与えてくださっている主に信頼することを忘れてしまうのです。私たちは、常に神を信頼し続けなければいけません。神は私たちに対する祝福を、いつでも思い直すことができるお方なのです。

C. 神と共に走る

またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。ヨハネ14:13-14

すべてを依存していたイエスがいなくなってしまうという事態を知ってパニックに陥った弟子たちに対して、イエスは「私の名で祈るなら私はそれを行う」と約束なさいました。これはどういう意味なのでしょう。ただ「イエスの名で祈ります」と終わりに付ければ、すべての願い事が聞かれるという意味なのでしょう。そうではありません。イエスの名、つまり、主の意志と同じであれば、ということなのです。神はご自分の栄光のため、ご自分のご意志をなさるのです。私たちが祈り求めることは、この主のみこころなのです。「神様、私の思いや願いに関係なく、あなたのみこころがなされますように」と祈り願うのが、私たちの祈りの本当の姿なのです。マッカーサー師は次のように語りました。

私は、ここグレイス・コミュニティ教会での働きが、頭の良い、また、創造的な人の働きではなく、神の働きとなることを願っています。私たちは、神ご自身の栄光となるため、神の働き人となることを願っています。私たちは、神ご自身の栄光となるため、神の御子の名により、神の御霊の働きを願うべきなのです。私たちは、強制的に自らを神に信頼させ、そしてイエスの望まれることがすべてなされるように祈るのです・・・ここグレイス・コミュニティ教会の目標は常に、キリストに教会を建てていただくこと、そしてその一部であることに満足することです。しかし、時々恐れることは、私たちがあまりにもプログラム中心になってしまい、災いが降りかかるまで、「神のみこころがなされるように」と祈ることを忘れてしまうことです・・・何かを行う前に、祈りに時間を取ることはほどすばらしいことはありません。その時、自由の意識をもってそれを行うことができるからです。みこころをなされる救い主と共に並んで歩んでいることを、あなたが知るからです。

XIII. 柔軟性：必要なことを喜んで行う

私たちに、物事を変える勇気をもつことが必要です。なぜなら、私たちは習慣にとらわれる危険性があるからです。「今までにそのようなことをしたことがない」という考え方が教会の方向を決めていくことは問題なのです。

マタイ15章で、イエスの弟子たちが先祖たちの言い伝えを破ったことで、パリサイ人たちはイエスを責めたという記事が書かれています(2節)。そこで、イエスは「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを犯すのですか。」(3節)と答えられました。ある教会では、あまりにも多くの伝統があり、神のみことばが命ずることを行うことができないようになってしまったケースがあります。教会には柔軟性が必要なのです。私たちは神に対して「神様、私たちは、あなたが導いてくださると信頼しています。そして、あなたの導かれる方向へ喜んで従ってまいります」と言えなければならないのです。

マッカーサー師は次のように語ります。「私たち人間は、習慣を作り出します。人が、ある事のある方法で行なうことに慣れると、それを変えようとする時、どれほど抵抗があることでしょうか。しかし、変えることは、しばしば必要なことなのです。その時人々は、習慣と、そうでないものとの違いに気づくのです。私たちは神に信頼しているのですから、柔軟でなければならないのです。」

XIV. 成長：成長することに関して食欲になる

生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。1ペテロ2:2

ペテロは、赤子がミルクにより成長するように、私たちはみことばによって成長することを教えました。、私たちが成長を望むならば、みことばを求め続けるという願いは非常に重要な願いなのです。私たちは、成長したいという願いを持っているのでしょうか。また、実際に成長しているのでしょうか。私たちは、教会の一人一人が「成長したい」という願いを決して失わないように祈り合っていく必要があります。私たちの成長は、ただみことばから真実を学ぶことによって起こることではありません。私たちが、神を知ることによって起こることなのです。

1ヨハネ2章でヨハネは、私たちがイエスを信じた時、神の子（小さい者）となり、父を知ったのだと教えています（1ヨハネ2:13c, 14a）。そして成長し若い者となることにより、悪い者に打ち勝つようになり（13b, 14b）、神を知ることにより、成長した者（父）となるのです（13a）。

みことばに対して渴きを覚えているでしょうか。みことばを熟考しているでしょうか。自分のたましいを養っているでしょうか。ヨブは神の命令から離れないと言い、「御口のことばをたくわえた」（ヨブ23:12）と言いましたが、果たして私たちも同じことを言うことができるでしょうか。私たちは、もし自分がみことばを知っていると思うならば、知らなければならないことがもっとあることを理解しなければなりません。神を知り、その交わりが深く、成長していくことが重要なのです。

ある教会で、80才を越える老人が、牧師にもっとゆっくり話してくれるように頼みました。彼は、みことばを学び、成長したいという思いから、自分の衰えてきた力でもノートを取り、語られるみことばを理解するためにこのようなことを訴えたのです。私たちは、みことばをただ知っているだけではなく、実行していくことが必要なのです。メッセージを聞いてもノートを取ることをすらしなければ、私たちはいったい何を学ぶのでしょうか。みことばによって、生き方、自分自身は変えられていくのです。メッセージは単なる「良い話」で終わってはならないのです。

XV. 忠実：死に至るまで忠実である

マッカーサー師は「多くのクリスチャンは、霊的な短距離ランナーである。あることに加わり、すべての力で、しばらく働く。しかしその後、霊的引退をしてしまう。しかし神は、マラソンランナーを求めている」と言われました。1コリント4:2で「このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」とパウロは教えています。私たちは「何才だから働きが終わった」などと考えるべきではありません。私たちは、みことばにより成長し続け、いつまでも忠実に主に仕えていくべきなのです。

忠実に礼拝を守り、主と共に日々歩み、与えられた賜物を用いて、他の人の益となるように働いていくために、私たちは忍耐強くあるべきなのです。パウロはそれが自らの歩みであったことを、IIテモテ4:6-7で証しています。私たちのクリスチャンとしての歩みは、本当に神の前に忠実でしょうか。神は常に忠実（誠実）でありますが、私たちは神に対して同じ誠実さを持って仕え続けているのでしょうか。

XVI. 希望：永遠を考える

希望」という言葉はすばらしい言葉です。聖書がこの言葉を使うとき、それは未来への保証を意味します。クリスチャンは死に対する恐れがなくなり、死後を期待する者となったのです。パウロが言ったように、望みは私たちに喜びをもたらします（ローマ12:12）。私たちには救いの希望が与えられているのです（ローマ8:23, 24）。私たちは、この罪の体から全く聖いキリストの栄光の体へと変えられるのです。このようなすばらしい希望の中を私たちは生きているのです。それゆえに私たちはこの世のものに心を奪われるのではなく、永遠を見据えなければなりません（マタイ6:19-21）。もし私たちが天を見つめて生きるなら、私たちは天に宝を積むのです。この地上のことだけを考え、その時だけ良ければ良いなどという間違った生き方をしてはならないのです。一時的なものに目を留めるのではなく、永遠の観点から見なければいけません。私たちの力、考え、愛、金など、それらすべてのものは、永遠に残るもののために用いられるべきなのです。

教会の働きと責任

教会が神を神として認識し、みことばの権威に服従し、正しい教理を教え、個人的な聖さを求め、霊的権威に従い、そして正しい霊的態度を養った後、教会は何をする必要があるのでしょうか。教会に与えられている働き、その責任とはどのようなものなのでしょうか。この章ではこのことについて考えてみましょう。

I. 説教と教え

教会のなすべき働き、責任として最も重要なことは説教と教えです。この二つは、どちらもみことばの真理を宣べ伝えることに関係しています。これこそが教会にとって最も重要なことなのです。教会は、解り易く、直接的に、そして権威を持って、みことばを宣べ伝える責任があるのです。

A. メッセージ

「私たちはキリストを宣べ伝える」とパウロは語りました（1コリント1:23）。また、彼は自分の働きを指して、「神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた・・・」とも語っています（使徒20:27）。パウロは、聖書の一部だけを人々に伝えようとしていたのではなく、明らかに、みことば全体を語っていたのです。そしてこれは私たちの責任でもあるのです。時に現代のクリスチャンは、新約聖書だけを語れば良いと考えたり、福音さえ理解していれば良いと思ったりすることがあります。しかし、教会はその群れに集う一人一人が、みことばすべての真理にしっかりと立つことができるように、みことば全体を語る責任が与えられているのです。

B. 威厳

パウロは「信仰のことばと、あなたが従って来た良い教えのことば（教理）とによって養われているからです。」とテモテに語っています（1テモテ4:6）。これは、テモテが教会の人々を教える働きをするときに、彼が「キリスト・イエスのりっぱな奉仕者になる」原因なのです。テモテ自身がみことばによって豊かに養われるとき、彼は人々を正しく教え導くことができるようになります。このように、みことばによって養われているテモテは、威厳をもって人々に真理を命じ、権威ある者として教えることをパウロから命じられているのです。

この働きはテモテだけの働きではありません。教会において、みことばの真理を知り、みことばの実践によって成長している人々は、権威をもってみことばの真理を他の人々に教える働きをしていくべきなのです。パウロはテモテに、次のように語っています。「そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。」（11テモテ2:1-2）。権威をもってみことばを伝えていくことは、世代から世代へと受け継がれていくべき大切な働きなのです。

C. 教会の焦点

パウロは、教会を導く立場にいる人々（霊的リーダー）に対する尊敬を教えることを通して、教会のリーダーが「説教と教え」に焦点を置くべきであることを教えています（1テモテ5:17）。人はみことばを学ぶことによって、神のみこころを知ることができます。まず自分が学び、神の求めておられることを理解して、はじめて、神のみこころを他の人に伝えることができるのです。

教会でのありとあらゆる働き（礼拝、祈り、伝道、懲戒、牧会、訓練、また、仕えること）について、みことばから学ばなければ、私たちはどうやって正しい働きについて学ぶことができるのでしょうか。それゆえ教会には、みことばを十分に学び、実践することに励んでいる者による、みことばの教えと説教が必要なのです。

D. 注意

みことばを語る者には権威が与えられています。それゆえに、誰がこのような働きにつくべきか（長老の条件）、また教えるに当たってどのような注意が必要かを、聖書は私たちにはっきりと教えています。

1. II テモテ 2:15

「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす・・・」という言葉を通して、パウロはテモテに、みことばを正しく取り扱うことを願いました。

2. II テモテ 1:13

「あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしてください。」とパウロは言います。パウロはテモテに、みことばを宣べ伝えている者は、まず本人がその教えに専心し、実践しなければならないのだと教えているのです。

3. II テモテ 2:16

「俗悪なむだ話を避けなさい。」と語ることによって、パウロはテモテに、みことばに専心すること、みことばを語ることに、そして、世の俗悪から離れているようにと願っています。

4. II テモテ 2:24

「・・・すべての人に優しくし、よく教え・・・」とは、教会におけるリーダー、つまり主の僕が、教えることのできる人物でなければならないことを言っているのです。II テモテ 3:16-17にあるように、みことばが私たちを完全な者として建て上げていくのですから、教会のリーダーとなる者は、みことばをすべての人に良く教えることができなければならないのです。

E. 優先事項

パウロは、II テモテ4:1-2で「私はおごそかに命じます」と言いました。原文を見ると、4:1には「というわけで」という接続詞があります。それは、この「おごそかな命令」が3:15b-17で語ってきたことに深い関係があるからです。「みことばは、人々に、救いは何かを理解させることができます。そして、キリストにあって、あなたを完全にすることができます。だから私はあなたに命じる。みことばを宣べ伝えなさい」とパウロは言っているのです。「人々がみことばによって傷つくから、もっとやさしく語ろう」というような心配は無用なのです。私たちは、自分たちの知恵によってみことばを曲げるのではなく、神が語っておられることを、しっかりと伝達する責任が与えられているのです。

F. 内容

どうしてパウロはII テモテ4:2で「責め、戒め、また勧めなさい」と言ったのでしょうか。それは人々が、常に罪と戦っているからなのです。この三つの中で、最も柔らかい言葉は「勧める」です。これは人に対して、持っている態度を変えるようにと励ますこと、そして、もし変えなければ、裁きの警告をすることです。教会が語るメッセージは、罪を責められるものでなければなりません。その時、人々は自分の心をさぐるからです。また2節で「寛容を尽くし、絶えず教えながら・・・」と語るのは、一度メッセージを聞いたからと言って、人はなかなか変わらないがゆえに、忍耐をもって教え続ける必要があるからです。これがみことばの語る真理である、という確信を持って人々を教え続ける必要があるのです。メッセージを聞く者は、みことばに従って生きていくかどうか、という重要な問いを、聖書を通して、内住する聖霊によって問われているのです。もし神の前に正しくなければ、みことばはあなたが正しくなるまで、あなたを責め続けるのです。

G. 期間

いったいいつ、このみことばを語るという働きを教会はすべきなのでしょう。パウロはその答えを次のように表現しています。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。」(II テモテ4:2a)。ここでパウロは、どんなときであったとしても、常にみことばを語ることをテモテに求めています。人々がみことばに耳を傾けているときでも、みことばを聞くことを忌み嫌うときでも、どんなときでも、どんな人に対してでも、みことばが語られる必要があるのです。

II. 伝道と宣教

私たちは、「教会は世のために存在している」という事実を覚えるべきです。私たちが、神が望まれるように生きることにより、暗く邪悪な世の中において、人々は神のすばらしさを知ることができます。すべての働きの重要な目標は、人々をキリストに導くことにあります。

A. 伝道

伝道には、大きく分けて二つの方法があります。それらは、生き方を通じたものと、言葉を通じたものです。

1. 生き方を通じた伝道

クリスチャンである私たちの生き方、私たちの証が、キリスト教が信じるに値するものか、そうでないかを判断の材料になることが多々あります。もし、教会がキリストをほめたたえ、神に従順であるなら、私たちは私たちの信仰が確かなものであることを、人々の前で証明するのです。それゆえ、この世においてどのように生きるかは、クリスチャンにとって重要なことなのです。

マッカーサー師は次のように語ります。「私たちは、私たちの地域において、伝道的な生き方をするように召されたと信じる。主は私たちに、地の塩となるように（マタイ5:13）、また光となるように命じておられる（マタイ5:15）。」

「地の塩である」とはどういう意味なのでしょう。イエスが語られているのは、私たちが地上において、防腐剤の働きをしているということです。汚れに満ちた世において、クリスチャンは主の前に正しい生き方を示すことにより、その腐敗をとどめる働きをしているのです。私たちは、世とは違うのです。そして、私たちが聖い生き方をする時、そこには神の臨在が明確に現され、神の栄光を見ることができるだけでなく、未信者までもが、神の栄光を讃えるように変えられていくのです。私たちは、神を敬う生き方の模範を、この世において示すべき存在なのです。

また「世の光」とは、私たちが主の前に正しい生き方をしていくときに、私たちがすべての人に神のすばらしさを伝え、彼らが同じように主をあがめることができる、その働きを示しています。それゆえ、イエスは「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5:16）と言われるのです。私たちが世において、主が与えてくださる良い働きを実践していかないならば、それは主に逆らう、大きな罪なのです。

2. 言葉を通じた伝道

私たちは、福音を生き方で証するだけではなく、実際に口で語らなければなりません。ペテロが言ったように、「・・・あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意を・・・」していなければならないのです（1ペテロ3:15）。ある人が、多くのクリスチャンは北極の川のようにだと言いました。それは口が凍っているかのように、多くの人々が、キリストを宣べ伝えることに抵抗を感じているからです。私たちは、この世のことを話すのと同じように、主について熱心に語る者でなければいけません。そのために、私たちは積極的に多くの未信者を知ることが必要です。また、彼らに対して何を語るべきなのかを、しっかりと知ることが必要なのです。

私たちの生き方を通しての証があれば人は救われる、と考えるのは間違っています。人は福音を聞く必要があるのです。逆に、語ってさえいれば良いのだと考えるのも間違っています。なぜならば、私たちの生き方が私たちのメッセージの真実性を証明するからです。

B. 宣教

教会の働きは、その地域における働きだけではありません。世界的な視野を持つことが必要なのです。あらゆるところで福音が宣べ伝えられるように、私たちの資源が許す限り、教会は世界伝道の働きに積極的に参加すべきなのです。

III. 礼拝

聖書は私たちに、本当の礼拝、神が喜ばれる礼拝について教えています（ピリピ3:3; ヨハネ4:23; โรม12:1b; 1ペテロ2:5）。しかし、心からの献身的な礼拝がどれほど難しいか、ということは私たち一人一人がよく知っています。礼拝中、どれだけ私たちの思いが、神以外のことに向いているでしょう。私たちが賛美するとき、歌っている歌詞を真剣に考えて歌っているのでしょうか。また、語られ、教えられた神について熟考しているのでしょうか。

礼拝は日曜日に教会でするものだと考えるならば、それは大きな間違いです。神に対する礼拝は、私たちが教会にいる時だけに限定されるものでは決してないのです。人生のすべて、毎日の生活のすべてが、神への礼拝なのです。私たちが主に従順な時、私たちは最高の礼拝を捧げているのです。なぜなら、従順とは、礼拝の基本的定義だからです。

ヘブル10:22で「神に近づくように」と著者は勧めています。ヤコブ4:8でも同様に「神に近づきなさい・・・」と命じられています。私たちは神に近づいていく必要があるのです。そのためには、罪を神の前に清算して、神のことを真剣に考え、神に従う人生を送っていかねばなりません。賛美する時、みことばの朗読を聞く時、祈る時、私たちの心は神に近づいているのでしょうか。私たちの心が神の真実で満たされた時、心からの賛美、神への感謝があふれてくるのです。その時、私たちは本当の礼拝を捧げることができるのです。

IV. 祈り

正しい祈りを捧げるのは、非常に困難であると言えるでしょう。その理由は、祈りが、私欲のないものであり、個人的なものだからです。

A. 私心に基づかない

正しく祈ることが難しいのは、祈りが私心、私欲に基づかないものだからです。主が弟子たちに教えられた祈りを見る時、「私」という言葉が使われていないことに気づくでしょう（マタイ6:9-13）。この祈りは、個人的な願望に基づいたものではなく、神の栄光を、そして、人々の必要を包含しているのです。祈りは自分の必要を満たすために存在するのではないのです。それゆえに祈りは、利己的ではないと言うことができます。

自分のことだけを追求しない、本当にへりくだった人々が、神のみこころと人々の必要のために祈れるのです。パウロも「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」（エペソ6:18）と命じました。彼は私たちに、神の栄光なる御意志と、人々の必要のために、非利己的に祈ることを勧めているのです。

私たちの上に問題や困難のある時、祈ることはさほど難しくありません。しかし、このような必要のあるときだけ祈るという人は、祈りの生活が弱いものであることを認識しなければなりません。強い祈りの生活をしている人は、神の栄光が現されるために、また、人々の必要のために、忍耐強く祈り続けるのです。自分が空腹の時、パンを求めて祈り続けることはできるかもしれません。しかし、人の空腹のために祈り続けることが、私たちクリスチャンに求められている祈りの生活なのです。

B. 神との個人的関係に基づく

他の人に、自分がどれほど祈っているかを知らせられないことが、祈りを難しくすることがあります。パリサイ人たちのように、自分がいかに祈っているかを誇ることを愚かな人間は願うからです。しかし、祈りは人の目を意識してするものではなく、神との交わりを楽しみとするものです。「絶えず祈りなさい」とパウロは命じました（1テサロニケ5:17）。これは、私たちが一日中、頭を垂れ、手を組んで祈っていなさい、ということではなく、どんなときでも、常に神を意識することを命じているのです。つまり、私たちは、ありとあらゆる時（私たちが考え、行動し、語る時）に、神を覚えることが命じられているのです。祈りとは、すべてのことについて神と語り合うことです。あらゆる決断、行動、言葉が、主に喜ばれるものとなるために、私たちは常に主を覚え、祈りのうちに神のみこころを求め続けるべきなのです。

祈りは、神が与えてくださった武器です。私たちは神を離れては何もできない、ということをしかりと理解する必要があります。私たちが主に喜ばれることをすることが可能なのは、神が私たちの生活の力の源だからです。それゆえに、この神に依存し、祈り続けることが大切なのです。

V. 弟子化

イエスは教会に対して「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。」と命じました（マタイ28:19）。ですから、弟子を作るということは、教会にとってなさなければならない大きな責任なのです。

A. 定義

「弟子とせよ」というのは、「習う者を作る」または「弟子を作る」という意味です。大宣教命令と呼ばれるマタイ28章でのイエスの言葉を、多くの人は伝道の命令であると理解しています。しかし、ここで命じられていることは、伝道することではなく、弟子を作ることを覚える必要があります。弟子とは、イエスの教えを聞き、理解し、従う者のことなのです。イエスを信じ、みことばを学び、それを実践する者を作りなさい、と主は命じておられるのです。

B. 実践

ルカは、使徒の働きを、ルカの福音書の続編として記しました（使徒1:1）。ルカの福音書は、イエスが何を始めたのかということについて、そして使徒の働きは、イエスの働きの継続について書かれています。福音書は、イエスが弟子たちを訓練した様子を記しています。そして、弟子たちが人々を訓練している様子を、ルカは使徒の働きに書き記したのです。二千年後の今、私たちがイエスが始められた働きを継続しているのです（Ⅱテモテ2:2）。これは、まさにリレーのレースに出場したようなものです。クリスチャンは、信仰のバトンを世代から世代へと託し続けているのです。弟子作りは、成熟したクリスチャンだけの働きではありません。「私は、まだ良く知らない」と言うのなら、自分よりもさらに知識のない人を見つけ、その人を教え、共に成長していくのです。私たちは、互いに学び合い、成長するのです。

1. 伝道

弟子を作ることは、伝道することから始まります。福音を宣べ伝え、人々が信仰を持ち主に従ってほしいと願うように教え、導くことが弟子作りの働きの第一歩なのです。

2. 愛

弟子作りは、愛の態度をもって行われなければなりません。この愛とは、感情ではなく、必要のある人に仕えるという、へりくだった、自らを犠牲とする誓いを指しています。新約聖書の多くの手紙の中で著者たちは、手紙の読者であるクリスチャンたちを「愛する者たち」と呼んでいます。それは、著者たちがクリスチャンたちの成長のために、心から仕えていたその愛の態度を表す言葉でもあったのです。

3. 戒め

弟子作りに必要な愛の態度とは、傷つくことを言わないことではありません。パウロはコリントの人々を「愛する私の子どもとして、さとす・・・」ために、あえて厳しい内容の手紙を書きました（Ⅰコリント4:14）。この「さとす」という言葉は、「神が彼らを戒められる前に、彼らの態度を変えるために、人々を戒め、警告すること」を指しています。このように、人の罪を指摘し、矯正することは弟子作りの大切な働きの一つなのです。

4. 導き

弟子を作るものが言うべき言葉は、パウロがⅠコリント4:16で言った「私にならう者となってください」という言葉です。キリストに倣って生涯を全うしようと努力している人は、キリストがしたように弟子を作っていきます。そして弟子として訓練されている人は、キリストに倣って生きていくあなたの姿を模範にして、主に従うのです（Ⅰコリント11:1）。

確かに私たちは完全な者ではありません。そして日本人的謙遜のゆえに、私たちはなかなか「自分を見做いなさい」と言うことができません。しかし「私がキリストに従っているのを

見て、私に従いなさい」と私たちは言うべきなのです。自分の弱さを認識し、その弱さの中で、主に従う人生を全うするために努力する姿を、私たちは人々に教えていくべきなのです。

5. 教え

大宣教命令は、弟子を作る命令です。そしてその具体的な方法として、伝道をすること（バプテスマを授ける）、教えることが挙げられています。イエスは「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」（マタイ28:20）と命じています。私たちは弟子作りに励まなければなりません。主が与える大宣教命令を実践するためには、私たちは主が語られたことをしっかりと理解し、それをすべて教えていかなければならないのです。時には語ることによって、また別の時には自らの模範を通して、私たちは弟子として訓練する人々を教えていかなければならないのです。

弟子作りは、特定のクリスチャンに与えられている働きではありません。これはすべての信徒に与えられている責任なのです。自分の伴侶、子ども、救いに導いた人など、私たちには多くの弟子作りの機会が与えられています。これらの機会を用いて、神を敬う生き方を教えていくのです。

VI. 牧会

教会に集うすべての人々は、お互いを労り合う必要があります。私たちは、互いに労り合い、また、必要を満たすという働きに加わらなければならないのです。イエスは、ペテロに対して三度「わたしの羊を飼うように」と言われました（ヨハネ21:15-17）。イエスはこの言葉を通してペテロに、教会を世話していく必要があることを教えていたのです。牧会には、群を養うこと、導くことが含まれます（1ペテロ5:2a; 使徒20:28）。この働きは牧会者だけに与えられている責任である、と考えるのは間違っています。クリスチャンは一人一人が、皆の痛み、また、必要に気づくようにならなければなりません。そしてその痛みを分かち合い、必要を満たすのは、信徒一人一人の働きなのです。互いを愛し、労り、教え、励ましている教会は、全員が周りの人の必要を満たそうとその機会を求めているからです。

たとえば、1ヨハネ3:17で「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」とヨハネが語ったこの言葉は、ある特定の人にだけ語られていないということは明白です。ヨハネはすべての信徒が、あわれみの心を閉ざすことがないように、ここで教えているのです。

A. 働き

ヨハネ10章で、イエスはご自分が門であること、また、良き牧者であることをお話しになりました。イエスは、羊飼いが羊を世話する方法について語られたのです。羊飼いは、一日の終わりに羊が囲いに入る時、入り口の所に差し出された杖の下を通らせ、一匹一匹を調べました。その時羊に傷などがあった場合は、その上に油を注いで羊の世話をしたのです。それが、詩篇23篇で、ダビデが語っていることなのです。

B. 責任

教会は、個人のものではなく、そこに集うすべての者の教会です。私たちは羊であり、羊飼いなのです。教会に属する者それぞれに、主は管理の責任を与えられました。人々の必要を満たし、互いに霊的に、正しく生きていくように助け合う、という大きな責任です。羊飼いとして、私たちの持つ責任とは、養う（成長を促す）ことであり、キリストに似た者へと導くことなのです。

VII. 家庭を築き上げる

「神は家庭を、次の世代へ義を伝達するために用いられる」とある牧師は語ります。それは申命記6:7、20-25に、明らかに示されている事実なのです。そこには、家庭がこの世にあって義を保つ、また、次の世代に神の真理を伝える、最も基礎的な組織として主に聖別されていることが記されています。

それゆえに、サタンは家庭を攻撃するのです。サタンは私たちが住んでいる、不道徳、また欲望に満ちた社会を用いて、家庭を攻撃し続けています。ですから教会は家庭を守る必要があるのです。私たちは、子どもたちや若者を教え、訓練していかなければなりません。教会は、親が神に喜ばれる子育てをしていく

ために、みことばの真理をしっかりと理解し、実践する者に変えられていくための助けをしなければなりません。私たちは、この家庭を守るために、みことばを教える必要があるのです。

VIII. 訓練

教会は、人々を働きのために整えるところです。パウロは次のように語ります。

こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。
エペソ4:11-13

私たちは、ただ真理を教えるだけに留まるのではなく、学んだことを用いるように人々を訓練しなければならないのです。教会に与えられている働きを実践するのは、一部の教会員または牧師、ではないのです。すべての信徒が霊的に成長し、彼らが、自らの賜物を生かして、与えられている働きを成し遂げていくとき、教会は大人の教会として成長を遂げるのです。人々は成長することが大切です。それゆえ、用いられる者となるために訓練されることが必要なのです。

IX. 献金

ある人々は「もっとお金があれば捧げるのに」というようなことを口にします。しかし、どのくらい捧げるかが問題なのではなく、どこに心があるのか、つまりどういう心で捧げるかが大切なのです。パウロは「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」（Ⅱコリント9:6-7）と教えています。問題はいくら捧げるかではなく、どのような心で捧げるかということなのです。心に決めたものを喜びのうちに捧げる時、主はそれぞれに応じて祝福を与えてくださるのです。

神は私たちに富を任せてくださいました。私たちは神の前に責任があるのです。私たちは神にお返しすることによって、富を任せておいて大丈夫な者であることを証明できるのです（ルカ16:11）。私たちが所持しているものは、すべて神から与えられたものです。神の恵みのゆえに、責任を持って管理するように任せられたものなのです。それゆえに、自分の所有物を自分以上に必要とする人がいれば、それを譲る精神、これこそ、初代教会に見るクリスチャンの愛の実践の姿なのです（使徒2:44-45）。

献金というのは、従順になるための機会であり、また、数えられない祝福を受ける機会です。それゆえに私たちは、残り物を神に捧げるようなことをしてはいけません。犠牲のない捧げ物は、捧げ物ではありません。ダビデは、祭壇を築くために土地を購入しようとした時、あえて代金を払おうとしました。彼は「いいえ、私はどうしても、代金を払って、あなたから買いたいのです。費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません・・・」（Ⅱサムエル24:24）と言っています。

私たちが正しい動機で、神への愛また感謝の表現として、そして神を礼拝する行為の一つとして捧げる時、神はその捧げ物を喜び、また、その人を祝されるのです。

X. 交わり

交わりはクリスチャンにとって非常に重要です。「交わる」という言葉は、「共通の生活をともにする」という意味を持っています。つまり交わりとは、共にいること、互いに愛し合うこと、人生を分かち合うこと、親しく語り合うことなのです。また交わりには、重荷をもっている人の話を聞く、必要ある人のために祈る、病氣の人を見舞う、聖書研究会や様々な集会に参加する、また、初対面の人と賛美することなども含まれます。新しいクリスチャンと喜びを分かち合うこと、また祈りの課題を出し合うことなども交わりなのです。

あなたは自分の人生の問題を、他の人と、互いに助け合うために、分かち合っているでしょうか。愛する兄弟姉妹に対して、自分自身の心を開くことが大切です。私たちは成長のためにお互いを必要としているのです。